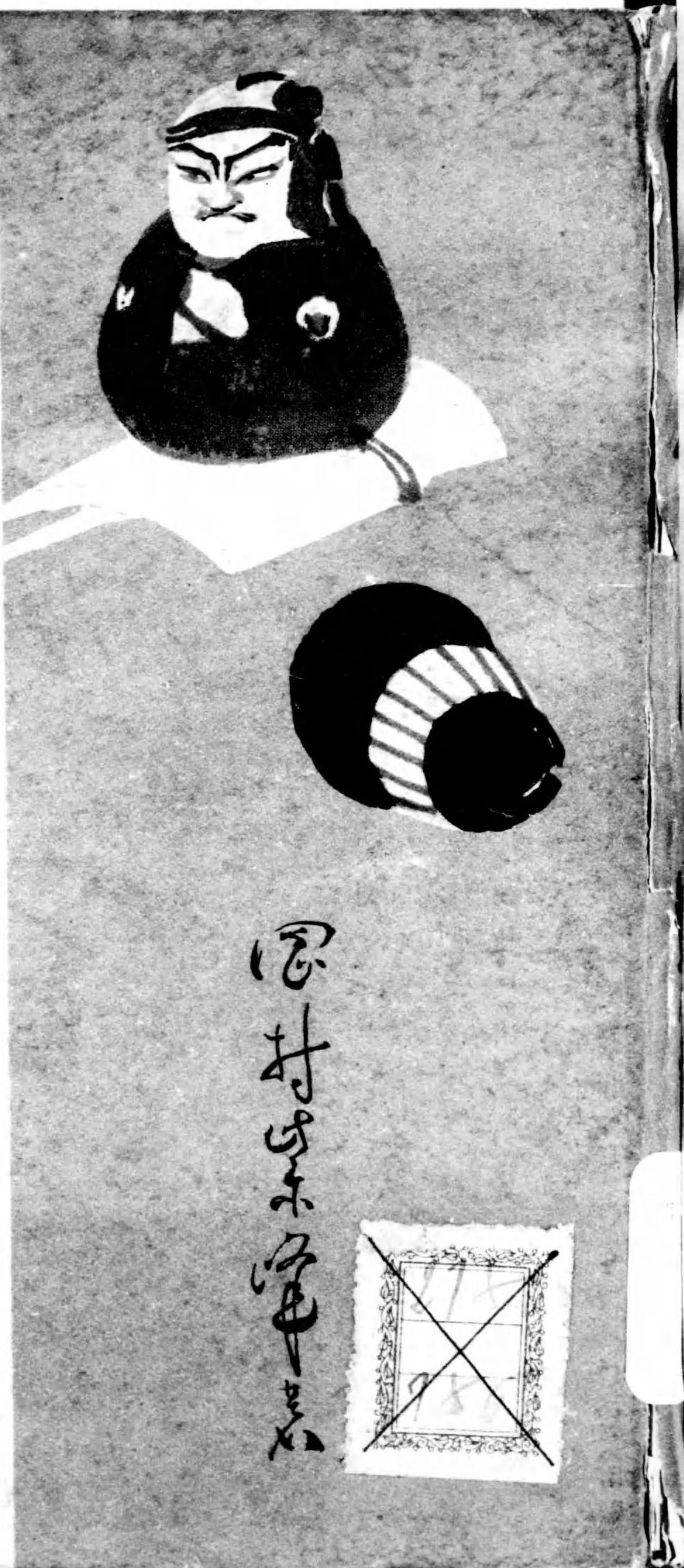
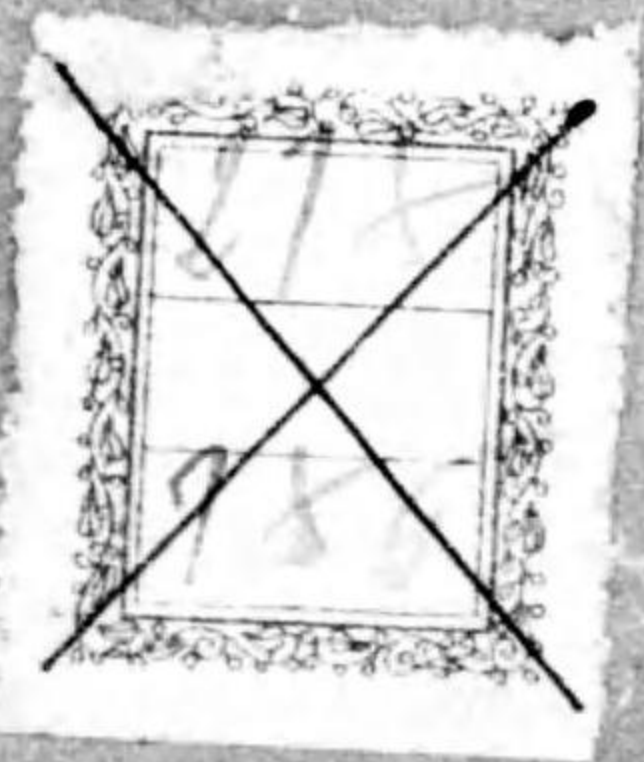


史記



史記

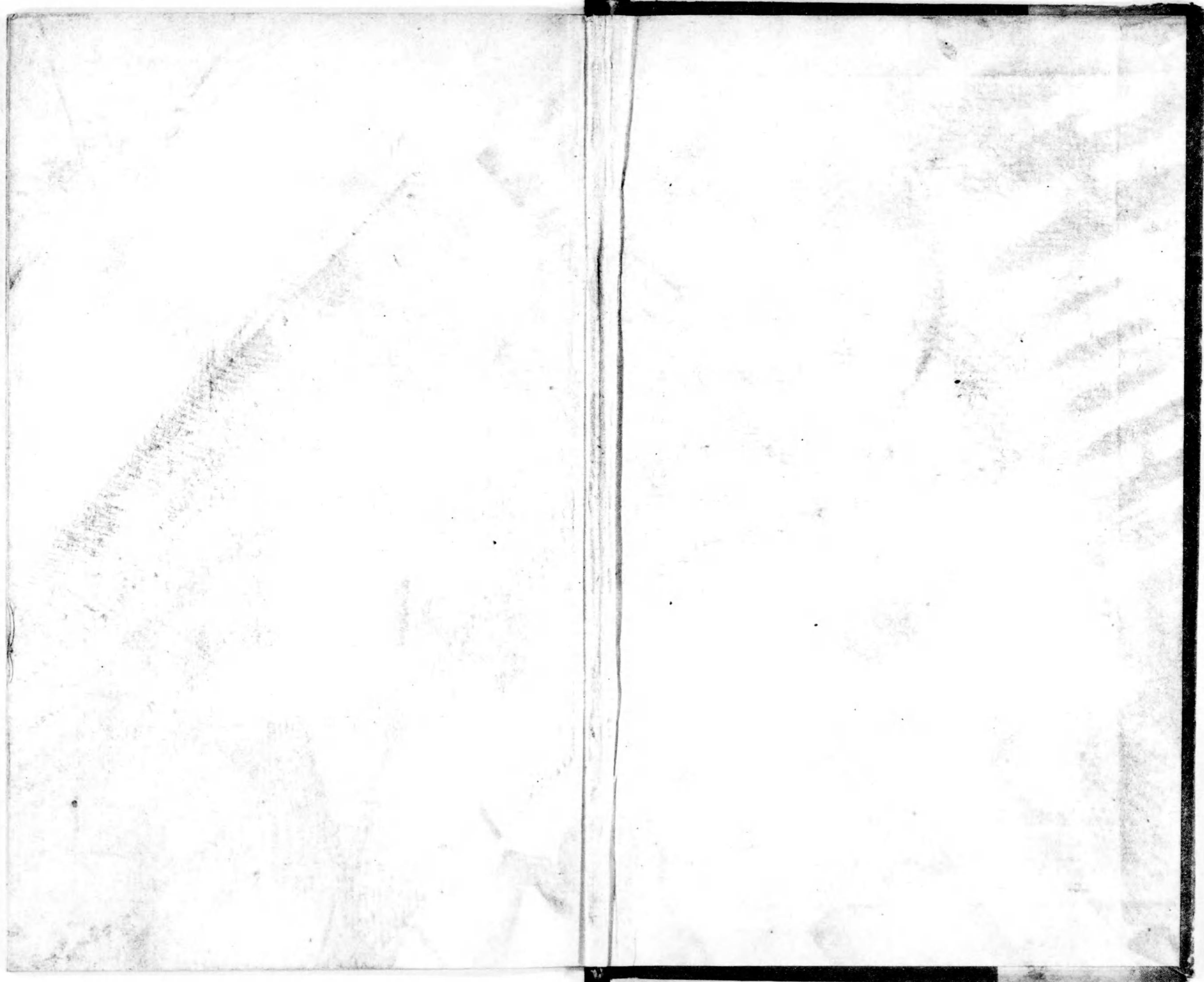


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始









特100

127



田男

男

紫峰

一

疋





## 序

友人岡村紫峰君は活動の人なり、其活動寫眞雜誌を經營する、寔に適處を得たりと謂ふべし。頃者其快著「男一匹」の卷頭に蕪辭を需めらる、予榮として之を諾す、而も實は未だ其書を見ざるなり。然りと雖ども多年予の知れる紫峰君は、正に英氣潑刺たる一匹の快男兒なり。其著の快たるや疑ふべからず。衣冠の修飾を俟たず、勳位の莊嚴を藉らず、赤條千丈の岩頭に立ちて狂風に嘯き怒濤を叱咤す、是れ男一匹なり。門地閨縁藩屏財閥等に依りて立

(1)



(2)

身を求むる者は、大臣宰相の位に上ると雖ども所謂狝猴にして冠する者、曷ぞ男一匹と謂ふを得んや。男一匹は實力の表現なり、予往年團洲の大口屋曉雨を觀る、其音容尙眼前に存す。稜々たる風姿、凜凜たる聲調叫んで曰く、男の中の男一匹と、溜飲下ること三斗なり。本書亦蓋し其慨あらん、序して君が成功を祈祝す。

大正五年天長節祝日

法學博士 粟津 清亮

序にかへて

學問を銜ふに非ず、虚名を賣るに非ず、たゞ「男一匹」の心意氣斯くの如しと、飾らず偽らずわが思ふ所を赤裸々に述べたるのみ。固より文の拙にして不備なるはわが菲才の致すところ、古人句あり  
夕涼よくぞ男に生れけり  
我目ざすところ此男のみ

大正五年十一月上浣

人繼の寓居にて  
紫峰識す



# 男一匹目次

## 序説

- 一、四月八日のお釋迦も裸……………三
- 二、男は何故一匹乎……………一〇
- 三、岡村の男一匹……………一六

## 本論

- 一、裸一貫で大道を濶歩する元氣……………二五
- 二、金より腕なり意氣込なり……………三一
- 三、成功は羨む勿れ勞働即ち快樂なり……………三七
- 四、屁理屈嫌ひと不言實行……………四五
- 五、乾坤を貫く至誠の力……………五二
- 六、清濁併せ呑む大度量……………五九

( 1 )

目次



七、	人世は戦なり浮世は戦場なり……………	六六
八、	匹夫の志奪ふ可らず……………	七三
九、	君子は器ならず……………	八〇
十、	身を捨て、仁をなす男の意氣地……………	八六
十一、	パンカラに非ずハイカラに非ず……………	九五
十二、	下つ腹に力を入れよ……………	一〇一
十三、	獨立自營は男の面目……………	一〇七
十四、	身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ……………	一一二
十五、	大樂天主義は男一匹なり……………	一一七
十六、	武士道の真髓に就いて……………	一二五
十七、	日蓮上人の大精神……………	一三五
十八、	文學に現はれた男一匹……………	一四〇
十九、	吾人は須らく男一匹を以て生涯を一貫す可し(一)	一五一
二十、	吾人は須らく男一匹を以て生涯を一貫す可し(二)	一六〇

序 説



# 男一匹

忍村素峰 著

## 序 説

一、四月八日のお釋迦も裸!

(3)  
裂帛一聲ホガアの産聲勇ましく、人間初めて娑婆の世界に飛んで出て来た時、果して身に何を纏うてゐたであらう。矢でも鐵砲でも来いと胸を叩く元氣な江戸つ子も、棺桶持つて迎ひに来いの長兵衛親分も、小さな拳固をウンと握つて、下つ腹に力を

序

説



(4)

入れて、取上婆の両手に乗つかつて、シテ來いなと踏ん張つた時には、天にも地にも自分の身代と云ふものは裸一貫の外に何物があつたであらう？

無一物の赤裸と言へば、天上天下唯我獨尊のお釋迦様でも、四月八日の甘茶の水は、裸で頭から浴びるではないか。それは慾の世界を解脱した佛様ぢやと云ふのなら、「裸でもよいお前とならば」の唄を御覽じ、煩惱の戀に囚はれても徹底すれば裸でよいと云ふではないか。

人間裸ほど氣樂なものはない。裸で道中がなるものかと、昔の人は愚痴つたげなが、そんな薄志弱行で何で浮世の荒波が乗つ切れよう。

(5)

土藏の何戸前、母屋に離座敷、庭園には山も池もあつて、それを取り圍む赤煉瓦塀幾町といふ大きな邸を構へた富豪でも、出るに馬車あり自動車あり、入るに金殿玉樓ある華族様でも、持つて生れた身代は矢張り無一物の丸裸。生中親から譲られたそんな財産があるばかりに、請願巡查を置いて火の番つけて、塀の上には釘の山硝子の破片の山を築き、まだそれでも安心ならすと、土佐犬やブルドッグまで飼つておかねばならぬでないか。

金は世間の廻はりもの、温め雞が卵を抱へたやうに、金庫に仕舞つて土藏に入れて、鐵の戸を締め錠をおろしておくばかりが能ではない。廻はり物は廻はさなければ效能が無い。なぜ廻



( 6 )

はさぬ？ なせ運用させぬ？ なせ働かせぬ？ 損するからだ、減るからだ、無くなるからだといふか。損するからこそ得もする、減ればこそ増しもする、無くなるからこそ儲けもするではないか。坐して喰へば何とやら、富士の山ほどお金を積んで、裾野から五厘づつ費つて行つても、無くなる時には無くなるもの、それを恐れてゐて何で仕事が出来る？ 事業が出来る？ 乾坤一擲の壯舉はビク／＼もので後ろを振り返つてゐては出来ぬ。こゝと思つた所で下つ腹に力を入れて、ウンと決心の臍を固めて、『これを遣り遂げなければ、男一匹の手前目ない。遣り損ずれば元の空阿彌、裸一貫になるぢやまでい』の膽が無ければ迎も駄目。抑も下つ腹にウンと力を入れることは、婆

婆にツン出たそも／＼に、習ひ覺えた唯た一つの力ではないか。唯た一つの力、之れを詮めて言へば獨力だ、獨行だ、他人に頼らぬ實行だ。

斯う言つて來ると、無け無しのやけのやん八が、獨り強がりの負け惜しみを並べ居ると、早合點する讀者があるかも知れぬが、著者の説く所は決して然うではない。

極東平和の盟主が何うの、海外發展が斯うの、いや新領土を何うしなければならぬの、八四艦隊の國防のと論じ立てた所で、いざ戦争となれば劔を執つて起つ者は誰だ？ 決死隊を組織して敵の封鎖を突破しに出かけるものは誰だ？ 飛行機御座れ、飛行船御座れ、潛航艇も何のその、命を投げ出して皇國のため

( 7 )



( 8 )

祖先の地を護る者は誰だ？ 鯨吼ゆる北海の果てから、獅子の荒れる南洋を跨にかけて、世界の富強國を向ふへ廻して、商業戦を遣る者は誰れだ？

學校を出ると直ぐに鼻を持つて、新婚旅行だの何だのと、名所古蹟をぶらつき歩く手合に決死隊の勇士になる元氣があるであらうか。氣分が何うの空氣が斯うのと、巢鴨の患者の嚙語のやうなことを言つてゐる連中に、全地球を活動舞臺として南船北馬することが出来るであらうか。タゴールが何うのトルストイが斯うのと言つても、矢張り喰はずにや生きて行かれない。喰ふためには働くことが必須條件だ。此の必須條件をそつちのけにして、只だ楽しい所面白い所へ一足飛びに出かけよう、出

( 9 )

かけることが出来ると思つてゐる輩がウヨウヨしてゐる。恰も歩行の出来かゝつた子供が、歩行の出来る嬉しさに、足もと見すに向ふばかり見ると同じこと、直ぐに跪く、直ぐ轉ぶ。それでも子供はまだ歩行の一念に驅られて、七轉び八起きで努めるからよいが、此處に所謂働くことの厭な連中に限つて、一度でも跪けば、もうへこたれる、もう意氣が沮喪する。いや沮喪するその意氣が初手から無いのだから問題にならぬ。

見渡すまでもなく眺めるまでもなく、現代には滔々として如上薄志弱行の徒がウヨウヨしてゐる。打てば鏘々の音がする稜稜たる硬骨、叩けばピンと跳ね返す氣魄、さう云つた男が現代に幾何だけゐるであらう。ハイカラの流行る世の中にバンカラ



( 10 )

めいた言論は容れられぬかは知らぬが、七千萬の同胞の中には、それでも三人や七人耳を傾けて呉れる者があらう。五人結構、七人澤山、臍拔けた手合の多数に讀まれるより、阿と言へば應と答へる少数者に讀まれてこそ、著者が本願成就である。乞ふわが云ふ所に姑らく耳を傾けよ。

## 二、男は何故一匹乎

今更めかしく云ふ迄もない事だが、立つて半疊寝て一疊死んで行く時や鏝六文、僅か五十年の生涯に、唯一の財産たり忠僕たり、保護者たるはこの六尺の臭軀——ではない、哲人の所謂

小宇宙、辱くも造物主の姿に模へて創造されたといふこの肉體である。

六尺の肉體小なりと云ふ勿れ、四身五體は宇宙森羅萬象を模り、その腦漿は空中水中を遍く征伏し得可く、また以て千年萬年の既往將來を考察するに足る。四肢の筋骨微なりと雖も、バナマ運河を開鑿し、バピロンの大塔、ピラミットを築くことが出来る。人間一匹の價值豈に偉ならざらんやである。

それであるのに世上の習俗、動もすれば、人間一匹の尊きことを忘れて、徒らに金を求め名譽權力に憧憬れる。僅々數十金のために生命を賭し、心身を損ねて顧りみざるの馬鹿者、我身の榮達富貴のためには父子夫婦友人の情と雖も、弊履の如く打

( 11 )



( 12 )

すて、恥ぢざるの破廉恥漢がある。嗚呼何ぞ、主客顛倒の甚だしきぞや。

金と云ひ名譽と云ひ、詮じつめれば、人間一匹娑婆に生きて行く爲めの方便であり、重寶となるだけのものではないか。有ればよし、無ければとて別に不自由でもない。蓬萊に人を遣はして、不老不死の靈藥を求めた秦の始皇も、百年の壽をすら保ち得ずして、秦の天下はたちまちにして亡んで了つたではないか。人の死んで行くときは頭陀袋に鏝六文。妻子珍寶王位眷族何一つ随ふものはないのである。裸で生れて裸で死ぬ！——これが人生であるからは、何を苦しんでか金や名譽に心中立して可憐男を損ふものであらうか。

( 13 )

強健なる身體と明晰なる頭腦——この二つを具へたらんには金銭物かは、爵位勳等何物ぞ、悠悠社會の大道を濶歩する事が出来るであらう。この心境こそわが男一匹主義の出發點である。扨然らば男一匹主義とは如何。そもく男一匹なる言葉は餘程以前から唱へられて居る。濫觴は大江戸の俠客の寛濶言葉に出たものであらうか。人間を數へるには必ず一人二人と云ふ所を、男一匹の時ばかりは飽くまで男一匹で、男一人とは云はない。嗚呼この「男一匹」——語は僅かに三字で盡きてゐるけれど、その調子、その語勢、餘韻には千萬言を以てしても語りつくせない深い深い味ひがあるではないか。



(14)

見よ失敗のドン底に陥り、または困難なる俗事が山の如く雲の如く身邊に蟻集して、茫然自失、いつそのこと首縊る縄でも欲しいと思ふときでも、突如として何を糞ツ男一匹だ、これしきの事に兵兒垂れてなるものかッ！」と自ら叱咤して起つ時、凜然たる勇氣が鬱勃として胸中に沸き上つて、今迄の女々しい悲觀は何處へやら、氣宇何時の間にか爽然たることは吾輩のしばしば経験したるところである。

事實「男一匹」とは啻に「男一匹」と云ふその言葉のうちに含んだ味はひであり、餘韻であつて、これを説明し、議論することは「男一匹」の意味を誤る所以であるかもしれない。けれども吾輩はこの「男一匹」なる言葉の内容または意義を中心として、久しい以前

から、一種の體系ある哲學を築かんと思ひ、其見る所世の所謂「男一匹」とはいさゝか趣きを異にして居るのである。

一言以てこれを盡せば男一匹とは國家のため社會人類のため、わが志す所に向つてあせらず急がず、真面目に一身を捧げて活動する健氣な元氣である。目的に到達せんためには、如何なる苦勞艱難も物ともせず、石に齧り付いても、成さずんば止まざる勇氣である。即ち眞に人間としての使命を自覺し、これに基いて社會國家のために活動することが「男一匹」の本領なのである。彼の安逸を貪つて勞働を嫌ひ、名譽榮達を求めに汲々として、而もその心にもなき大言壯語、五月の鯉の口先みたやうな輩は、吾輩の士ではない。眞にわが「男一匹」たるものは空言を弄

(15)



( 16 )

するをさけて、黙々實行を勵むを本領とするのである。  
以下こゝに述べる所は男一匹として世に處するに必ず服膺すべき條項である。哲學と云ふは未し、唯男一匹の神髓をば網羅して、一々説明したにすぎないのである。舉世滔々華美墮落の淵に沈淪せんとするもの多き時に方つて、いさゝかにも此書によつて武士道の氣骨を喚び起し、これに依つて其幾分なりとも墮落を未然に喰ひ止め得れば著者の本懐である。

### 三、岡村の男一匹

「醫者の不養生坊主の不信神」とやらで、自ら實行し能はざるこ

とを他人に強ひるほど馬鹿げたことはあるまい。いくら立派な道徳でも、處世論でも、實行することが出来なければ三文の價値もないではないか。

何々教授、何々博士と云ふ碩學鴻儒のお歴々が、人間は斯うしなければならぬ、どうしてはいけないと、古今東西の哲理を引ぱり廻して説教迄されるところは立派だが、さて實行となる。ととても聖人賢者ならぬ吾々凡人の及びも附くものではない。否な博士大學者その人ですら百年かゝつても二百年かゝつてもその一つとして行ひ難いのであらう。

實行の伴はない議論はこれを空論と云ふ、空論は無きに如かずだ。わが「男一匹主義」は空論ではない。そは吾輩の抱負たり理

( 17 )



想たると共に、又吾輩の豫ねて實踐躬行して來たものである。決して空疎な卓上の議論ではないのである。

これを容易に實行し得るもの、また必ず實行し得べき底のものである。「男一匹主義」は所謂道徳ではない。片々たる所謂處世法ではない。貧しいながら吾輩自らの實際經驗の唯一なる教訓に基き、眞に男らしく、即ち男一匹として生く可きの要領を述べたものである。

今男一匹主義を説かんとするに當つて著者が如何なる男であるか、また如何なる動機で「男一匹主義」を主張するに至つたか、その徑路の大略を紹介して置く必要があらう。

斯く云ふ不肖岡村紫峰は、今年數へ年の卅八、明治十二年十

二月四日、九州の一寒地、水白く山青き筑紫の國の一隅に呱呱の聲を擧げたのであつた。

固より氏も素姓もない一農家、それも以前は相當に家産も持つて居たが、父の代になつてから、不時の大火災に遭つて家運猝に没落し、吾輩が物心付く頃になつては猫額大の宅地と數畝の田地の他には財産と云ふ可きものはない許りか、借金は山をなす有様だつた。斯かる中に年を重ねた吾輩は、人の好い父母が日夜生活のために齷齪するのを見ては、『ア、人も男われも男、石に齧付いてなりと家名を挽回し、父母をして安堵させねばならぬ』と小さい胸にいつしか堅く思込むに至つたのである。

苦しい中から漸く師範學校に學び、卒業後は暫く教育界に入



り、育英の事に従つて居たが、後に感ずる所あつて決然實業界の人となつた。其間或時は他人の食客となつて玄關に坐り、或は筆耕書記生を勤める等具さに人世の辛酸を嘗め盡した。實業界に入つてから僅かに數年、活動寫真勃興の機運を見てとり、僅々二十圓の金を資本として斷然不知案内なる出版業に轉じ、活動寫眞の雜誌發行を企てたのは昨年(大正四年)の五月で、今日未だ奮闘の半ばにあることは諸君既に熟知の事實である。悉しく話せば長いことであるが、これは拙著「漂浪三十年」に於て語ることゝなし、姑らくここには割愛する。靜かに過ぎ來し方のわが半生を思ふとき、その餘りに波瀾に富み、曲折の多きに我乍ら慄然として時に膽を寒うするものがある。

如上述べ來つたやうに、吾輩は殆んど高等教育の一端を窺ふことすら出來ず、僅かに師範學校四ヶ年の教育に加ふるに幾分の獨學をしたばかりである。それが男一匹主義なぞと、大きな口を利用しては所謂學者諸先生の嗤笑を買ふかもしれない。しかし吾輩も男一匹だ。學問はなくとも僅か乍らも浮世と奮闘した貴い經驗はもつてゐる。理屈は云へなくても腕はある。勞働を以て理論に換へ、學問を捨て、實行を先とする「男一匹主義」で今日まで押通して來た。吾輩が、そのかうと信ずるところを天下に呼號するに何の躊躇する所があるであらうか。

働ける所まで働いて見よう。彼の人事を盡して天命を待つ、それが吾輩のモットーである。正直に眞面目にベストを盡して



(22)

働いてさへ居れば、それが世間に認められると否とに拘らず、笑つて瞑することが出来るのである。即ち單なる成功の空名を追求するに非ずして、働くだけ働いてみる事其自體が、唯一の快樂なのである。

斯の心持を抱いて、吾輩は今日まで活動を續けて來た、否な今もこの「男一匹主義」を以て、飽くまでも奮闘して見るつもりで居るのだ。重ねて云ふ男一匹主義は理論ではない實行の主義そのものである。裸一貫を以て世間を濶歩する、眞の男の守本尊である。

本

論



# 本論

## 一、裸一貫て大道を濁歩する元氣

生れたまゝの腕一本脛一本をば唯一の資本として、世の中を渡るのが男一匹の氣概である。爵祿頼むに足らず、富貴は浮雲の如しと達観すれば、貧苦艱難も恐れるには足らない。身にまとふ衣服はおんぼろさんぼろ、囊中は無一物、水を飲んで飢をしのぐ境涯にあらうとも、一向に悲観煩悶することはあるまい。彼の西郷南洲翁の名言に、「金も命も惜しくない人間ほど世に

(25)

序

説



始末に了へぬ恐ろしい者はない。と云はれたとあるが實に宜なる哉だ。金を以て誘つても、威勢を以て嚇しても、乃至は名譽や地位を餌にしても、泰然自若ビクともしない人間は實に始末に了へない。そして他人から云へばこれほど扱ひ悪い厄介な奴はまたとあるまい。嗚呼、これこそ男一匹の男一匹たる人物であるではないか。

凡そ男たるものが自分が斯うと信ずる所を遂行するに當つては、何者の妨害、何物の攻撃をも物ともせず目的に向つて突進すべきである。男は飽くまで一匹、二匹や三匹たるを欲せざるもの、飽くまで一匹を以て押通す可きものだ。孔子が「千萬人と雖も我行かん」と揚言せられた如く、己れの信ずる所を行ふに他

人の嘲笑も非難も敢て意とするに足らんやである。

凡そ男たるもの金や地位と云ふ附焼刃を頼まずして、堂々と裸一貫で天下の大道を濶歩する元氣がなければ、六尺の禪の手前申譯けない次第ではないか。

しかりと雖も、人間が此浮世に、社會的生活を營むに當つては若干の金錢が必要である。名譽も地位もなければならぬ。進んで國家のため社會人道のため或事業を成さんとするならば、一層多額の金錢と自己の社會上の位地が必要となつて来る。何んとなれば何處の馬の骨かわからない風來坊が、いくら高遠な主義のもとに大事業を計畫して廻つた所で、誰れ一人耳を傾るものもなからうではないか。して見ると自分の體面を保つに足



る社會的信用と収入がなければ、完全な人間として男子として  
 獨立獨歩して行くことは困難ではないか。自ら立つ能はざる風  
 來坊や居候にどうして、自ら「男一匹」を任ずるの資格があらう。  
 彼等は男としての屈辱に甘んじて居るものと云はなければなら  
 ない。

とは云へ金や名譽が決して人生終極の目的物でないこと言を  
 俟ない。それは、あれば便利であり、都合がいゝと云ふだけの  
 もの、金錢の奴となつて、黄金の岩の前には義理も人情も、乃  
 至は自分の主義主張も生命までも擲つて顧ざる金色魔や、立身  
 榮達を求めめるためには、男の大事な節操も糞もあつたものでな  
 い、幫間に等しい阿諛追従をナンとも思はない骨拔鱈式の人間

に至つては、全く事の本末を穿きちがへた大馬鹿者と云はねば  
 ならぬ。

それ迄は行かなくとも、金がない貧乏だからと云つて兵兒垂  
 れて小さくなつて居るもの、社會的地位が低いからと云つて、  
 我が思ふ所、正義と信ずる事もじつと胸に押隠して、唯だ事勿  
 れとのみ願ふ貧乏根性や氣質は、「非男一匹」の甚しきものでなけ  
 ればならない。猶且つ貧乏を以て自ら誇り、世間に容れられな  
 い故を以て聖人君子を氣取るやうなヒネクレ者や、偏屈人など  
 と男一匹とが著しく相違してゐることもまた忘れてはならない。  
 宰相の位を追はれた支那の屈原みたいに、世に容れられざるを  
 以て徒らに憂憤し煩悶し、遂ひには世を呪つて汨羅に投ずるや



( 30 )

うな手合は實に憐む可き者だ。

また誰れしも敢て貧乏はしたくないもの、しかし貧乏したからと云つてこれを苦にするのは、既に金銭の奴隷となつたものと云はなければならぬ。名譽や地位はあればあるに越したことはないが、無ければとて、「男一匹」の體面に關はることではさらく／＼するまい。凡そ男一匹たるもの貧乏や地位の賤しいことをば苦にはす可きでないが、それを看板にして、世間に用ひられない故を以て自ら聖人ぶり、賢者顔をすることは敢てしないのだ。清廉潔白以て己れを持し、自ら信ずる所に向つては如何なる障礙をも物ともしないのが男一匹であるけれど、敢てその清廉や潔白を看板にして他人と争ひ、世間に反馳するとはない

のである。自ら信ずる所を行ふに躊躇はしないが、一度これが過ちを悟つたなら、翻然として邪をすて正に就いて、少しの執着をも残さない男らしさがなければならぬ。要するに如何なる事にも囚はれず、赤裸々のまゝ自分を衆人の前に投出して恥ぢないのが眞に男一匹の貴い點であるのだ。

## 二、金より腕なり、意氣込なり

( 31 )  
彼の英傑ナポレオン一世が歐洲全土を蹂躪したとき、彼れの率ゐてゐた軍隊はいつも敵の半數乃至四半數にも足らなかつたに拘らず、彼れの軍は到る所の戦闘に連戦連勝した。彼れに幾



倍の精兵を蓄へ新式な武器も彈藥も十分に用意した敵軍は、反つて風に吹き拂はるゝ木の葉の如く、たちまち追拂はれて、那翁が馬蹄の蹂躪にまかせたのである。

九郎判官義経が、西國に平家の軍を追討したときは、いつも彼れは僅かの手兵を提げて平家の陣に切り込み、目に餘る敵の大軍をば一人残らず西海の藻屑と消えしめたではないか。戦ひと云ふものは兵數が多いから武器が精銳だからと云つて、必ず勝つと定まつたものではないのである。兵は奇なるを貴ぶ、軍隊が上下一致して獅子奮迅の勢で、命を的に奮戦すればこそ勝利を占めることが出来る。彼の那翁は戦ふときは、いつも白色の駿馬に跨つて陣頭に立ち、雨下する砲火の中を物ともせず、

真先に敵に切り込んで行つたさうだ。義経も同じこと、彼れはいつも味方の先鋒となつて部下の勇士等と先を争つて進んだ。この意氣があつてこそ彼等は英名を千載に擧げることが出来たのである。

我等が世に處し事を成さんとするに當つても、矢張戦ひと同じである。決して多額の資本を有し便宜な地位にあればとて、必ずしも事業に成功するものではない。「俺も男だ、すれば出来んことはない。いやどうしたつて出来さずには措くものか。」と云ふ堅い自信と熱烈な意氣込みとがあれば、よし資本は乏しくとも、事を爲すの便宜は少なくなるとも、成功は必ず期す可きものである。見よ那翁は「不能の文字は愚人の辭書にのみあり」と喝破



した。古人も云はずや「信ずるは貫くの基」と。一旦之をしようと決心することは成功に到る第一歩である。「爲さばなる爲さねばならぬ何事も成らぬは人の爲さぬなりけり」で、爲て出来ないことは世の中にはない。志を立てずしては如何なる少事と雖も断じて出来やうはない。

一度び志した上は断々乎として毫も躊躇狐疑することなく事に當るべきである。精神一到何事かならざらんとは、志の決して奪ふ可らざるを道破した大真理である。

事に當つてはどんな努力も労働も、また如何なる犠牲を拂ふのも厭はない決心を抱かねばならない。善し、資本が少なければ、自分の労働を以てこれに代へよう。人の一度なす所、己れ

これを三度し、人の三度する所、己れこれを十度する底の精神で、骨身惜まず働いたなら、如何なる基礎の固い大資本を有する者と競争してもこれに打勝つことが出来るのは火を賭るよりも明かである。恰かも軍隊が戦場で一刻一秒の隙もなく、弓の弦のやうに緊張した気分寸毫の油断もせずして各自の部署を守つてこそ戦に勝つことが出来ると同じく、事を成さんとするには一日半時と雖もこれを疎かにしてはならない。絶えず工夫に工夫を重ね、思案に思案を積んで発展の方法を講じなければならぬ。實に「油断は大敵」とは平凡なれども千古動かぬ金言である。事に當つては一時もこの金言を忘れてはならない。

我々男たるものが、或事をなさんとするに方つては、他人の



力を借り、または千番に一番の兼ね合ひの僥倖を頼みとするのは卑怯未練な、男としてあるまじき行爲と云はねばならぬ。自ら侮つて人これを侮る。凡そ他人の金錢を借りまたはその庇護をうけて事をなすは、即ち自ら侮辱するもので、男一匹の一匹たる尊い價値を自ら落して、半匹四半匹とすることである。僥倖を狙ふはこれまた寝たまゝ柵から落ちる牡丹餅を待つて口をアングリ開けてゐるやうな者は共に男たるものゝ齒するに足らぬ卑劣な人々である。

男一匹を以て任ずるもの決して金錢に縁薄きを歎ずる事勿れ。よろしく勤勞を以てこれに堪へるが宜しい。金は一度費へば無くなるものだが天賦の肉體は勤勞するに従つて其能率を益々増

進せしめることが出来るのである。二十世紀の世界は實力の世界である。須らく成功を期するには斯うと決心した道に向つて一心不乱に猛進しなければならぬ。限りある資本を頼まずして、自分の腕によりをかけて只管に活動し奮闘する外はないのである。即ち眞に男一匹の意氣を以て宜しく自彊勤勉國家社會に貢獻す可き偉業を志す可きである。

### 三、成功は羨む勿れ、勞働即ち快樂なり

十數年以來雨後の筍のやうに「成功の秘訣」「成功の捷徑」と云つた



( 38 )

類の出版物が出るが、果して成功と云ふことが人生終局の目的であらうか、頗る問題である。少しばかりの金を儲け僅かな地位を得たと云つて「我は如何にして成功せしか。」斯の如くして成功すべし。なぞとさも鬼の首でも取つた如くに世間へ吹立て、廻り、世間の人もそれを謹聴して羨望して止まぬなぞは實に沙汰の限りである。

凡そ人間の眞價は棺を蓋うて定まるものである。生きて居る間から其人の成功大小を論せんとするのは野暮の骨頂である。生きてゐる間は一意専念に活動し奮闘しなければならぬ。勉強もすべし、研究もすべし。我等は死ぬまで青年の氣持を持ちて居るべきである。人間もつとつと進まうと云ふ向上心があ

り、野心があれば決してどこまで行つてももうこれで安心だ俺も成功したわいなぞと脂下れる筈のものではない。

人間一日生きれば一日だけの經驗をつみ、一日だけの仕事を残すものである。して見れば人間死ぬまでは、もう俺は何んでも知り盡した、此上もう何も見ることも聞くことも要らん、もう俺は働きた過ぎた、此上働くには及ばんからゆつくり隠居でもして樂をしようと思ふ女々しい根性を起し、小成に甘んぜんとするのは、大きく云へば國家の蠹賊、小さく云へば事業に自殺する不届者と云はなければならぬ。

東洋人流に四十の年をきけばもう樂隠居をしたがつたり、かかりつ子の心配でも始めたり、さもなければ淨世を捨て、隠遁

( 39 )



三昧の生活に憧憬れたりする。實に卑怯未練な話、云はゞ戦に出で途中で鐵砲を打つのが厭になつたから轉つて遊ばうと、ノコ／＼散兵線から後方へ退却をするやうなものである。そんな男らしからぬ即ち「非男一匹」な手合ひには宜しくどしく制裁を加へて性根玉を入れ換へさせる必要があらう。

さてまた一方、世間所謂成功とは果して何を意味するか、吾輩には一向わかり兼ねる所だが、普通一般に誰れそれは成功したと云ふ成功の字義は、少し金錢を蓄へるか、やゝ良い社會的の好地位を獲得したと云ふことらしい。云ふまでもなくこの意味の成功は、眞の意味での成功ではない。成功と云ふことは、或事を仕上げる finish する意味があるのだが、人間が少し金をた

め、より良い社會的地位を占めることは、何等事を成就した所以ではない。寧ろ、金が出来、地位を得た以上は、それを根柢として、更らに國家のため社會のため大々的の事業を企てねば相濟まないわけである。

しかし世間的の所謂成功、金を得地位を獲得ると云ふことは、先づ男子として爲すあらんとするもの、目的に達する第一歩である。考へて見よ、金がなく社會の信用がなくて何事か爲し得るものであらうか。さればこの所謂成功をせんと望むことは決して答む可き事ではない。男と生れて貧苦に迫られて屈辱的の生活を送ることは決して男らしい所業ではない。

併し云つて見れば成功は活動と奮闘との結ぶ木の實である。



棚から落ちる牡丹餅的僥倖は、これを成功と云ふことは出来難い。僥倖で得た所のものは決して三文の価値のあるものでない。泡沫の如く消え易く消えれば跡形も残らぬものである。粒々玉なす汗と血を以て築き上げた成功——地位と名譽と財産こそ真に有意義にして価値のある真の成功と云ふべきであらう。故に成功は望む可きものではあるけれど、無暗に他人の成功をば羨みそねんではならぬ。夢我夢中で所謂成功熱に浮かされる輩は、憐む可く賤む可く、「男一匹」たるものが齒するに値せぬ大馬鹿者である。

人間は働くために生れて来たものである。人の一生は働くことを離れて一日半時も意味のあるものでない。如何に我々が休

止しようとしても、一秒時たりとも我々の内臓機關は運動を休めることはない。心臓は常に鼓動し血液は動脈に出て静脈に戻り、胃腸は消化作用をついけ神経系は刺戟に感應して止むときはない。真に人間の活動の止むときは死ぬときである。生きることは不斷の活動が伴ふこと今更言を俟つ迄もない。凡そ世間には活動し奮闘することが苦痛であると思つてゐる人間も少くないが、實に大なる誤りである。たゞ生活に追はれて厭々ながら心にも染まない労働をして居ても、労働其ものに對する執着さへあれば興味は自ら起るもの、況んや真にわが志す目的を自覺しそれに向つて働くことは苦痛どころか、最大の快樂であり歡喜であらねばならない。



勞働を嫌ひ安逸を貪る懶惰な人間は、この人世の目的を發見することが出来ないで、憐む可き無自覺のまゝ、醉生夢死するの徒である。

活動し奮闘することの快樂は、人間として經驗し得べき最も大なるものであらう。最も意味の深い人生の大事業であらう。して見れば人生の目的快樂は十年二十年の後に待つべきものにあらず、今日一日の奮闘は今日一日の自我生活の全部であり、今日一日の自己の享樂は悉くその中にある。そして成功は奮闘的生活の生む當然の結果で、それは丁度僅かの金を毎日貯蓄する人が何年かの後に莫大な財産となつて現はれて來るが如く、自然に報はれる賜物である。

成功は望むべく期待すべきものであるが、現在の奮闘はそれ以上に緊切な自分に取つて價値の高い有意義なものであることを忘れてはならない。眞の成功の望まば今日一日の勤勞を惜む勿れ、現在に享樂し、一步一步目的に向つて奮闘し活動するのは眞に男一匹として生きる第一歩である。

#### 四、屁理屈嫌ひと不言實行

古代日本國の異名に「萬事揚せぬ國」と云ふことがあるが我等の祖先たる太古の日本人は、七面倒な理屈をこね廻すことの大嫌ひな不言實行主義の國民であつた。生中面倒くさい文字と云ふ



ものがない其頃の社會では、口傳へに必要なことだけを述べるにすぎず、昔の事柄を覚えてゐる物語部と云ふ家柄があつて代々所謂歴史を口傳へに子孫に傳へて居る。——云はゞ體のいゝ活きた歴史文庫で、文字代用の人間が居た位極めて簡素なものであつた。

文字がなければ下らない哲學でムるの、人生觀がどうしたの、厭世がいつた轉んだなどとは云はうたつて、云ふことが出來なかつた。法律の第何條がどうした、勅令が斯うのとうるさい三百屋式論、言論の自由だ壓迫だ内閣が善い惡いなど、愚にも付かない政黨壯士の云草も、文字や辯論と云ふものがなければ出來て來はしない。

文學がなく議論がなく、上下一致和合して生活を楽しんだ上代の人間は實に幸福だつた。而も彼等は現在の生活に安心して、因循姑息に流れるやうなソンないみつたれた人間ではなかつた。飽くまでも發展的な進歩的な國民であつた。諸々の醜草生ひ茂る「豊蘆原瑞穂國」をたちまちのうちに平定して、天壤と俱に窮りなき大日本帝國の基を定めたではないか。

天照大神が瓊瓊杵尊を大和國に下し給うた時に三種の神器を授けられたとは、智仁勇の三徳を云はず語らずの間に深遠な意味を寓されたもので、云はゞ辯を好まなかつた素樸な古代日本人氣質をば、よくも物語つて居るではないか。

希臘の格言にも「金の沈黙、銀の雄辯」(Golden silence & silver speech)



と云ひ、我國の俗語にも言葉多きは品少しなぞと稱して、下らない辯舌議論の價值少ないことを訓へて、深い意味を含んだ沈黙が雄辯にいやまさる偉大なる力のあることを道破して居る。

斯く太古には辯舌空論を好まなかつた日本人も後に三韓唐國との交通が開けるに及んでは、彼の國の雄辯修辭の術が輸入されてがらりと變つて猝に理屈つぽく、繁文縟禮に慣れるやうになつた。更に明治大正の今日に至つては世間が萬事に科學的に七面倒臭く學者ぶり、お伶俐ぶる、悪い習慣が付いた。

飯を食ふにも營養論があつて何を何勿食へばどれだけの滋養がある、玄米が好い、いや半搗米だ、パンがどう麥がどうと多額の金を出して不味い物を食つて滋養と稱して居る有様、コン

ナ事は實に下らぬ新學說に囚はれた屁理屈の最も悪い適例である。

學者の學者臭ひのは眞の學者に非ず、味噌の味噌くさきは眞の味噌に非ずで、學者臭い學者の屁理屈などは決して何等オソリテ一がないのである。「八百の嘘を上手にならべても誠一つに叶はざりけり」喋々喃々いくら口先巧みに空論詭辯を弄んだところか、確固たる内容が無ければ沙上に立てた樓閣も同然、一陣の風にも忽ち粉微塵になつて了ふ。「百日の説法屁一つ」とはこの間の消息によく云つたものであらう。貴ぶべきは内心の誠「桃李物言はざれども下自ら蹊を成す」で、誠心誠意孜孜として事に當るならば、襪褌に包んだ珠玉の如く燦然たる光輝は暗夜を照し



て何時しか人に認められるであらう。

余男一匹主義を奉ずるもの、下らない根も葉もない卓上の空論に囚はれたり、中心の誠實の缺けた詭辯にお互ひに煩はれされ合つてゐる今の社會に嫌焉たるもの少くない。飽くまでも萬事揚せぬ主義を奉じた我々先祖の偉大な樂天的な心意氣こそ眞に羨ましいものではないか。

「云ふは易く行ふは難し。」徒らに議論を弄ぶは極めて容易だが、サテ實行となると中々出來難いものである。實行の伴はない議論はなきに等しい。徒らに大言壯語自ら以て快しとする三百屋氣質は男一匹たるもの、唾棄する所である。

敢へて自分のお國自慢ではないが九州男子の本領はこの實力

主義である、江戸つ子は五月の鯉の吹き流し同然、兎角鼻つ端しが荒いがいざ喧嘩となると腰のないのが缺點である。反之我等九州男子は口こそ拙ないがイザ喧嘩となれば相手を屈服させるまでは一步もあとに引かないのが特色である、この意氣が九州人のすべてにあらはれてゐると少々自慢をして置く。

無學でいゝ野呂間でも關まぬ、天真爛漫、自己の力を資本として休まず撓まず目的に向つて一歩々々の努力をするのが男一匹たるもの、本懐である。それが先祖傳來の日本人種の主義である主張である。經驗なき學問より學問なき經驗、花よりも團子を尙ぶのが、男一匹の男一匹たる所以なのである。



( 52 )

## 五、乾坤を貫く至誠の力

「コンナ世智辛い世の中に正直にしては、可愛い口が乾上つて了ふ。」「ナアニ權謀術數を用ふるのは偉人豪傑の常だ、敢へて躊躇するには當らん。」なぞといふ、加減な手前勝手の口實を設けて、嘘言を吐いたり、他人を中傷したりして、ナンとも思はない人間が少くないが、随分間ちがひ切つた話である。

そんな人間にかぎつて、決して偉人でもなければ、英雄でもない。權謀術數の必要も勿論なく、嘘言を吐いてお體裁をつくり小刀細工をすることが反つて身に仇をなすのをば心付かない

のである。沈香も焚かず屁も放らず、平々凡々夢の如く生れて幻の如く死んで行く手合ひなのである。

凡そ人間が直情徑行——ありのままに行ひ、有りのまゝに言ふことは理の當然で、心にもない嘘言を吐くと云ふのは、即ち下らぬ小刀細工をするやうなもので、道の正しきものでない事は、道德ナンカを引ぱり出さなくつてもわかかつてゐる話である。しかし眞の正直と云ふのは果して嘘を云はないばかりが眞の正直であらうか、決してさに非ずである。

吾輩の云ふ正直は、所謂、愚直、馬鹿正直ではない。天地を貫く至誠の赤心を云ふのである。眞に男の男たる心意氣を云ふのである。假令時と場合に由つて權謀術數を用ふるの止むを得

( 53 )



ざることあるも、心の底の至誠から發したものであれば決して罪と云ふことは出來ないのである。權謀もよし術數も可なり、たゞ要は至誠の心の彼れに存するや否やに關はるのである。彼の孔夫子の言に「内に省みて疚しからずんば夫れ何をか憂へ何をか怖れんや。」とあるは皆なこの至誠の心を指したもので、口先きだけのうそを云はぬケチな馬鹿正直の意味ではないこと勿論だ。

至誠の心を以て事に當れば何物かこれに抗ひ得るものぞ。天地を動かし、鬼神をも感ぜしめると云ふのは人の誠心である。生きては心濶達として自ら樂み、死に臨んでも泰然自若從容として死に就くことが出来るのは至誠の心である。

心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん

神と云ふものが此世にましますならば至誠の人をこそ守護し賜ふであらう。賽錢をなげたり、手前勝手な願ひをしたところ、天地宇宙に磅礴たる神の御心に叶ふことがあらうか。眞に正しき人の道を踏み行ふことばかりが神の道に叶ふものとはねばなるまい。

( 55 )

しかし我等は人間である。社會的生活を營む人類の一分子であるからは、人と人との複雑な關係から、延いては時と場合で言葉の上にお世辭や駈け引や權謀術數を用ふるの止むを得ざることともまた屢々ある。それを一々取立て、人間うそを云つてはならぬからと、馬鹿正直に小心翼翼としてゐたのでは兎て



( 56 )

も満足に、社會的生活を營むことは出来ない。  
 假令たとへそくても朝あさおきてお早はややうと云いひ、物ものを貰もらへば有あり難がたう  
 と云いふ。まさか他人たにんを掴つかまへて馬鹿野郎ばかやろうと怒ど鳴なることも出で來き  
 ねば、自分じぶんのことを日本にっぽん一の英雄豪傑えいゆうがうけつだとも云いへたものではな  
 い。瀕死ひんしの病人びやうにんに向むかつて、容態ようたいを聞きかれて、「お前まへは今日けふ死しぬん  
 だぞ。」と正直しやうまきに云いふ者ものも先まづあるまいし、年とし老とつた兩親りやうしんに向むかつ  
 て自分じぶんの心配事しんぱいごとを打明うちあけたら反かへつて親不孝おやなかつになると云いふものだ。  
 商人しやうにんには駈引かひきあり、軍人ぐんにんに謀計はかりごとあり、僧侶そうりよに方便ほうべんがある。それ  
 を一々いちいち虚偽きぎであるから云いつてはならぬと咎とがめ立たてをした日には  
 人間にんげん一日いちにちも虚偽きぎなき能あたはずだ。

然しかし術策じゆつさくを弄もてあそび事實じじつに相違さうゐした事を云いふのは道みちの奇きなるもの

( 57 )

である、變則へんそくである。言いふこと行おこなふことが車の兩輪りやうりんの如ごとく相伴あひとも  
 ふは男をとこたるもの、理想りきさうとする所ところである。小人せうじんに嘘言うそごんの多おほいのは  
 志こころざしが弱よわいからである。自ら信しんずること厚あつからず、他人たにんを恐おそれ  
 るからこそ一時じを糊塗ことせんがために出でまかせの逃にげ口くちを云いふ。  
 それは自分じぶんの弱點じやくてんを相手あひてに握にぎらせるやうなものでこれほど愚ぐな  
 「非男一匹主義ひをとこひきしゆぎも甚はなだしいことはない。  
 自己じこの利欲りよくのために事ことを妨さまたげて他たを排擠はいせいし、徒黨とたうを組くんで人ひと  
 を陥おとしれるが如ごときは、男一匹をとこひきなるもの、惡にくみても餘あまりある、女め  
 女めしい卑怯ひけつな曲まがつた根性こんじやうと云いはねばならない。直接ちやくせつ他人たにんに害がいを  
 及およばさぬ迄までも猥わだりに人ひとを疑うたひ、人ひとを信しんせざるは男一匹をとこひきの風上かざかみに  
 置おけぬ賤いやしむべき人間にんげんである。「人ひとを見たら泥棒どろぼうと思おもへ」と云いつて出で



逢ふ人毎に猜疑の眼を向けて、容易に胸襟を開くことが出来な  
いのは卑い島國根性の發現でなくて何んぞやだ。

古い日本の道徳では餘り力を籠めて教へてゐないが、自己を  
偽ると云ふことほど男らしからざる、而も下劣なことは又とな  
い。苦し紛れに一時逃れの手段として心にもない事を口に出し、  
反つてそれがために自縄自縛に陥つたり、乃至は空しい虚榮虚  
名に浮かされ、所謂成功の夢に浮かされて、眞の自己の價値も、  
自己の地位も打忘れて、その結果が自分を損なひ、人を陥れ、  
社會にも害毒を流すに至ること少くない。己れ自らを知らな  
いから、言ひ換へれば「男一匹」の意義を覺らないから斯かる結果  
になると云ふものである。實に天地を貫く至誠の心は男の男一

匹たる精神から發露する。眞に至誠の人たらんとするには強い  
「男一匹」の自覺から出發しなければならぬのである。

### 六、清濁併せ呑む大度量

「水清ければ魚棲まず、人賢ければ友少し。」なぞと稱して、自  
ら社會に容れられぬをば自分の清廉潔白なる折紙のやうに心得、  
無暗に世間を輕蔑して聖人面を下げる人間が世間に居るが、其  
愚や實に嗤ふ可しである。

人間たるもの時勢に反し、世間に容れられぬことが毫も彼の  
尊い所以ではない。千載竹帛に唄はれる偉人が多く同時代の社



( 60 )

會に容れられざりしは偉人なるがため、その眞價値が容易にわからなかつたためである。世間に容れられざるが爲めに偉人ではない、偉人なるために世間に容れられなかつたのだ。

自ら世間に反いて以て尊しとしてゐる人間は、虚名を喜ぶ偽善者賣名漢か、さもなくんば器量の小さな、杓子定規式な人間である。

社會が腐敗したらば何故これを救ひ出さゝるか。世人が迷へるなら、その正しき所を示して、誤れる所を矯正せざるのだ。然るに人間を嫌惡し、社會を嘲罵して喜ぶは何んたる不埒極まることであらうか。

彼の釋迦牟尼如來も、始め浮世の果敢なきを感じ給うて、山

( 61 )

に入られたが、それだけなら決してお釋迦様は有難くない。諸の難行苦行——新しい言葉で云ふと精神修養を積まれた末、始めて正等覺を成就され、迷へる世間の衆生を遍く濟度しようと再び山を出でられ、御説法を遊ばされたに至つて始めてお釋迦様の價値がある。始めて家をすて妻子兩親を捨て、世に反かれた意味がある。獨り精神修養をつんで高い人格を築き上げたところが、これを以て他人を救ひ世を益することなければ、猫に小判、ほんたうの寶の持腐れである。

凡そものを理解するには熱烈な同情に基かねばならない。ものを改革せんとするには徹底した理解に由らねばならない。吾人が社會や他人の非を覺り、これを矯正せんとするなら、先づ



社會に對し他人に對して深厚なる同情を心のうちに培はなければならぬ。佛教で云ふ大慈悲心も、基督教の愛もこの他人に對し社會に對して假令罪に汚れて容易に救ふ能はざる境涯にあるにせよ、猶ほこれを包む熱い熱い同情を云ふのである、只冷酷な罪を憎む眼で他人に對し世間を見るのは、精神修養の足らざる偽君子の常と云はねばなるまい。

否な社會を救濟し、人を導くに至らずとして、唯日々の社會的生活を營み、他人と圓滿に交つて行くにしても、相手の心を抱擁する博い同情がなければならぬ。相手の主觀を或程度まで了解し得る理知の眼がなければならぬ。さもなくなれば、決して人間らしい、「男一匹」的生存は出來難いのである。

凡そ世人は口を開けば善惡正邪の區別を無雜作につけ、あれが、これが悪い、と事もなげに云つてのけるけれど、果して實際に於て正邪善惡と云ふ區別がなるか否かは問題ではあるまいか。

所謂世間で極惡非道、鬼とも蛇とも惡魔とも云ひやうのない大兇賊極惡人でも、その精神のうちには案外清い美しい人情と云ふものが潛んでゐること疑を容れないのである。彼の石川五右衛門が湯鑊の刑に處せられるとき、熱に堪へ兼ねて筋骨の自由を失ふまでは、可愛い吾子五郎一を頂上高く差上げて居たと云ふではないか。

「實に人の性は善なり、境遇に支配され様々の動機に動かされ、



( 64 )

所謂極惡非道の人間となつたものも、必ずしも血も涙も涸れ果てゝゐるものではない。血も涙もない冷血動物のやうな鬼權式人物も至誠を以て動かせば、如何でこれを感動させ得ぬことがあるであらうか。

主觀を離れて絶對境より見るときには正邪善惡の區別は決して在るものではない。國家、人類社會の利害と云ふものを標準として見るとき正邪善惡の區別は生ずるものである。國家社會の恩寵に由つて今日まで無事に安穩に其日の生活を營むことの出来る我等が國家社會の利益を尊重し、これを擁護すべきは理の當然である。私利私欲を捨て、公利公益を計り、自ら直うして他人に迷惑を及ぼさないやうにするのは、人間が社會生活を

營む以上一日も忘れることは出来ない。

然も罪を惡んで人を憎まずとやら、社會に害毒を流した惡人と雖もその罪こそ憎む可けれ、その人はこれを憐み愛するだけの大度量と大慈悲心とがなければ、眞の「男一匹」とは云ふことが出来ないのである。

殊に小さな自己の主觀に執して、利害打算や、自分の感情から無暗に他人を惡黨呼ばはりをしたり、嫌な奴だなぞと毛嫌ひしたりするに至つては言語道斷沙汰の限りである。こんな人間には「男一匹」の價値なんか解るものではない。畢竟區々たる些事に拘泥して、蝸牛角上で喧嘩をするやうな、チツポケな一生を過して了ふ大馬鹿者の手合ひである。

( 65 )



( 66 )

もつと高い所に眼をつけよ。そして廣大無邊なる大宇宙を觀よ。世間の有象無象を一呑みにする大きな度量があつてこそ、眞の男らしいわが男一匹たることが出来るのである。心に一點の邪念も挟まず、例へばソドムの火のやうな、熱烈な至誠の心を以て吾に敵對せんとするあらゆる人間の心を焼き盡したならば、決して敵を造ることは無いであらう。區々たる自己の感情區々たる利害を捨て、何人をも容れる廣い度量こそ男一匹の眞價であるのである。

## 七、人生は戦なり、浮世は戦場なり

「人生は戦なり」と西哲が道破したのは實に千古の名言である。凡そ吾々人間が此の浮世に生存して行くには、時々刻々激烈な生存競争を續けて行かねばならぬ。競争があれば落伍者、劣敗者が出るは理の當然。吾等が此世に生存するためには、その半面には多大の犠牲が拂はれつゝあることを考へねばならない。人間の生存に缺く可らざるものは先づ第一に食物である。食物は水や食鹽や石灰と云つた無機化合物だけでは駄目だ。必ず蛋白質脂肪分澱粉質等の有機化合物を攝取しなければ、健康を保全することは困難である。そしてこれらのものは他の動物の肉や卵や乳の類に由つて得ねばならない。假令肉は食はない、卵も乳も口にしないと云つてもこれに代る可き植物類の蛋白質や

( 67 )



( 68 )

脂肪や澱粉を食はなければならぬ。

佛教や其他で肉食を誡め肉食を主張するものがあるけれど、もしそれが他の生物の命を奪ふことが罪惡だから、肉食をしないといふのなら、それは肉食する罪惡と五十歩百歩の話である。今日の學說では植物も動物も同じく生物で、原始生物アミーバから進歩した同じく細胞から成つたものであるからは、動物の命を取るも植物の命を奪ふも、どつちも殺生に相違ない。斯んな風に人間有機物を食ふことが罪であれば、畢竟水と鹽を嘗めてゐる外何物をも喰ふことが出來ず、人間忽ち死んで了はねばならぬ。近頃流行る斷食と云ふことも、半年も一年も食はずに生きることは、恐らく出來るものであるまいではないか。

人間生の體をもつて居る以上は、必ず他の生物の命を奪つて行かねばならないこと斯くの如くである。もし恐らく牛馬羊豚鯛比羅目鯉の類乃至は大根人参牛蒡米麥大豆の仲間に靈魂あれば、人間はその祟を受けて一晩も安く眠ることは出來まい。しかし彼等には幸ひにそんな氣の利いたものは持ち合せがないから、先づ安心して可なりである。

斯く人間が生きるには他の生物の命を奪はねばならないが、果してそれは罪惡であらうか。佛教にも「一殺多生」と云ふことがあり、俗諺にも「小の蟲を殺して大の蟲を生かす」と云ふ、萬物の靈長たる我々人間様が、造物主から享けた大千世界を支配する大使命を果たす爲に、必要に應じて下等動物をして肉も果實も

( 69 )



献上させるのは理の當然である。大の蟲たる人間が小の蟲とも云ふ可き下等な生物を殺生するのは決して悪い事ではないのである。吾人が地球進化のために貢献する所多くば、始めて牛馬羊豚五穀野菜の亡魂も修羅の妄執を晴らして、目出度成佛することが出来るであらう。

また人類社會、吾等人間同志の間に於てもまた同様である。或る一個人が成功し地位を得て、月桂冠を頭上に輝すに至るには、一方に於て幾人幾十人の人々が競争に敗れ、不運敗戦の巷に陥るかわからないのである。その成功が大きければ大きいだけ、犠牲もまた多い。一將成功萬骨枯とは實によく此間の消息を道破した真理ではないか。

敢て戦争には限らない、社會の生存競争裏に角逐するに於ても、一人の成功者の陰には斯も多數の劣敗者を出すものである。萬骨を枯らし、多くの人を不運の境に陥れて、功をなした勝利者は、人類のため社會國家の福利を増進す可き功業を建て、こそ、彼れの成功には始めて意義が出る。拂はれた犠牲の價值以上の功績を世に遺すに非ずんば、成功と云ふことは意味がないのである。彼の大奈破翁は幾百萬の精兵をムザ／＼殺して了つたが、それは反つて歐洲全土に互る一エボックメーカーキングとなつた。彼れを非難する人は無意味なそして殺伐な暴れ者で世界の平和を亂した不埒な人物に過ぎぬと云ふが、決してさうではないと思ふ。彼れの偉大な英雄的精神はどれだけ世界の人心を



( 72 )

感動させ感化したことであらうぞ。敢て今更に彼れの功績、彼れの事業は云はずとも、これだけで既にナポレオン其人の雄圖の決して意味のない事でないことが判つて来るだらう。燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんやである。

學生がよくやることだが、運動會の選手には、各自が醜金して、卵や肉や其他の滋養品をウンと御馳走し、甚しいのはその生活費の全部まで負擔して、いよく競争と云ふときに第一着を占めるやうに力をつくすことがあるものだ。

云つて見れば英雄や偉人と云ふものはこの選手のやうなものである。彼れの生れて來ることは、その社會や國家に多少厄介をかけ、國民の懷中をいたませ、少々は辛い目にも合はせるが、

結局はその國家の威光を輝かし、社會の福利を増進せしめる。そこで始めて英雄や偉人の眞價が現はれると云ふものである。

要するに、正しい競争は善であり、犠牲者を出すことは人間が肉體的な生活をするからは致しかたのないものである。宜しく男と生れたもの此世に生きて行くに要した犠牲の價值より餘計に活動して宇宙人類の將來に裨益する所ある可きである。これぞ眞の人間の使命でなくてなんぞやだ。

( 73 )

## 八、匹夫の志奪ふ可らず

男一匹の一匹とは完全獨立の個體であるといふことを意味し



てゐる。半匹や四半匹乃至は二匹三匹ではない、たつた一匹――不羈獨立にして自我自尊、しかも自動的な意思作用の主體であることを表明してゐるのである。

希臘の詭辯學者も云つた「人間は萬物の靈長である」と。成程自分と云ふものが存在しなかつたら宇宙の森羅萬象は全く空に歸して了ふ。物を見る聴くと云ふことは眼や耳やの感覺が神経中枢に傳達して起る主觀的意識で、吾人が直接に實體そのものに觸れるのではない。要するに自分の主觀は自分に取つて絶對の權威である。色盲に取つては青く見えるものは實は赤いものであつても彼れに取つては永久に青だ。他人がいくらそれが赤だと云つたつて全く始まらない話なのである。

凡そ人間が自分で斯うだと信ずることは彼れに取つてはどうしても動かすことの出来ない眞理である。また人が斯うしなればならぬ、斯うしたいと思ふ意思は如何なる權力を以てもこれを壓迫し轉換させることは出来ないものである。「匹夫の志奪ふ可らず」で、どんな賤しいケチな人間、太郎兵衛さんでも次郎作どんでも、心の中に思つてゐることを思ひ止まらせることは、殿様でもお代官様でも出来るものではない。

人の思ふこと、云ふものはどんな威力を以てしてもこれを束縛することが出来ない。詩人バイロンは「牢獄の中に鐵の鎖で手足を縛められて居ても、自由な我が思想は天地の間を走せ廻つて居る」と唄つたが實に尤もである。この思想て自由な天地



を飽くまでも廣く深くし、そのうちに快樂の境地を見出すのが、吾人眞に男一匹たるものの忘れてはならない所である。

この肉體と云ふものは僅か五十年そこくで消滅するもの、その間に享樂し經驗する分量も數へて見れば僅かのものである。しかし思想と云ふものは東西古今幾千萬載に通じて往くところ遮るものはないのである。眞に人間が價値のある生活を營なまんとするなら、物質的の生活を次にして先づ精神的生活を廣く深く開拓して行かなければならない。

飽くまでも物に囚はれ煩はされ、拘泥する事のない極めて自由な思想の天地に逍遙せんとするは男一匹たるものが忘れてはならない所である。男一匹とは決して豪傑振つて安つぽいステ

ツキを振廻すことでもなければ、下らぬ負惜しみや獨り善がり云ふことでもない。眞に獨立獨歩な何事にも煩はされない自由なる自我の境地を存するものが、男一匹の男一匹たる所以である。お釋迦様の云はれた「天上天下唯我獨尊」の眞の意義もここに

にあるであらうと吾輩は思ふのだ。他人に對してもその思想、その志す所を無暗に誹謗し、卑下嘲弄すると云ふことは此上もなく相手を侮辱し切つた話である。眞面目に他人が志して居ることをば害し、茶々を入れたりすることは假令無邪氣な惡戯であらうとも極めて善くないことである。自己の思想の自由の尊い所以を覺つたらば、他人の思想の自由をも決して蔑ろにすることは出來ない筈である。



他人を尊敬し、禮讓を守ると云ふことも、無意味な禮儀や尊敬では困る、他人の意志の尊重でなければならぬ。他人の思想に對して表す敬意でなければならぬ。そこに至つて、禮儀や作法と云ふものゝ意味が出て來るもの、さもなくて只習慣的に禮讓を守り、自分の利益打算から人に媚び諛ふのは、人を尊敬する所以でもなければ、禮儀を守る所以でもないのである。己れを尊び、自ら重んずることは自分の意思の働きや思想の自由を外界から煩はされ束縛されぬやうに、そして發展進歩の方向を誤まらぬ様に之れを愛護して行くことである。深くして正しき反省に由つて、自分と云ふものを解剖し批判して、その誤つた所を摘み取り正しく優れた所を培ひ育て、

自己の向上發展を計るは眞に自己を尊重する所以である。しかし見すばらしい現在の我れに執着し固持して、少しも自ら反省せず、小さな貝殻をこさへて其中に這入ることは自己を愛する所以では決してない。どこまでも鋭い理知の眼に照らして自分を批判し向上發展をこそ計る可きものである。「男一匹」たるもの自らを知り、自らを重んずるに非ずんば、決して男の「男一匹」たる意義はわかつては來ないものである。自己を没却し、否な自己と云ふものゝ不明瞭な、浮萍の如き不徹底な人間には、世を動かし、人を感せしめるやうな大丈夫の雄圖は思ひも寄らぬ所である、そんな人間にはとても美しい眞の意味での他人のための犠牲と云ふことなぞはわからないのである。



( 80 )

## 九、君子は器ならず

現今の教育と云ふものは人間をこさへるのではなく、生きた自動機械を製造するやうな傾向がある。たゞ必要なだけの知識を詰込みさへすればそれでいい、人格なんかどうでも關はないと云ふやうな主義の學校教育を経て、社會に吐き出された中等社會の人間は、商人は商人、軍人は軍人、教育家は教育家とチャンと型にはまつた千篇一律な算盤を弾く機械、戦争をする道具、子供を教へる人形と云つた風に全く境遇に囚はれて了つて、定まつた人格もなければ自覺もあつたものではない。いくら力ん

だところが男一匹否な男半匹たるね、うちも其んな木偶坊先生にはないのである。

凡そ五十人も百人も一つ教室に詰め込んで、教授がノートを讀みくペラく立板に水を流すやうに鉤屑に火の付くやうにいくら喋舌つたところが、サテそれで人格も出来なければ、眞に徹底した自覺も生れては來ない。斯うした十把一束の教育のために、いくら立派な天才が殺されて了ふかわからないのは事實である。

しかし考へて見ると、現今のやうな行き詰つた世の中に、舊式な人格教育天才教育と云ふことは出来るものではないかもしれぬ。據ん所なく、ペラくサラくの詰込主義が用ひられる

( 81 )



( 82 )

のだ。經濟的に云つても此方が便利であるからかもしれない。しかしわれ／＼「男一匹」たるもの何んで自動機械に見す／＼なつて了ふことを肯じていゝものだらう。飽くまで生れたまゝの赤裸々な人間、「小宇宙」と云ひ神様の身體に型取られてこゝへられた立派な人間の能力を培ひ育て、行かねばならない。飽くまで男は「男一匹」を守らうではないか。既に世間に人格を修養し、眞の自己意識を醒ましてくれる教育がないとするならば、自分らが刻苦して人格を修養し眞に自分と云ふものを目覺めさせねばならない。

孔夫子も、「君子は器ならず」と云はれた。凡そ人間がいくら學問の蘊奥を極めてゐようと、一技一藝に他人の眞似の出來ない

能力を具へて居ようとも、たゞそれ丈で、人格的に中心點がなかつたならば、まるで生きた字引である。ものを製造する器である。そんな字引や器械には逆も男のねう、ちなんか有りつこはないのである。

況して世間の有象無象共、學校を卒業して、髯を生やして月給を取らう、さうしていゝ女を鼻にもらつてスキートホームをつくつて安樂に一生を送らう、と云ふやうなけちな考への人間は、とても吾々「男一匹」の意味はわからないのである。

而も荒い社會の波風は、人の心を鈍らせ銷磨して、天才をも凡人と化し、生々しい血潮も冷めたい死灰の如くに變つて了ふ。學校を出るとき大なる抱負を抱いて、意氣揚々とその志す所に

( 83 )



向つて行つた青年が、二年三年たつうちにその抱負も志望も次第にうすらいで、けちな腰辨根性になる、自動機械に變つて了ふ。畢竟するにそれはその人間が弱いからだ。薄志弱行だからだ。社會の風波が如何に強くとも、生存競争が如何に激烈なればとて、わが精神界まで浸蝕されるのを防がれぬことはない。防がれないのは意志が弱いからだ、反省が足らぬからだ、人格が確立してゐないからだ。換言すれば眞の男一匹たるの自覺がないからだ。鞏固な意志があり、深い反省があり、人格の中心が確然として居たなら、ドンナ境遇に陥らうとも、自動機械となることは決してない。飽くまで「男一匹」で通せるのである。境遇に囚はれず境遇を支配し利用して、その目的に向つて進

むに非ずんば、「男一匹」と云ふことは出来ないものである。働くために食ふ、これは人間と生れて仕方がないことだが、食ふために働くに至つてはその生活は全く無意味である。しかし此處に云ふ働くことは、生活の資を得る勞働を云ふのではない。高遠な自己の目的に向ふ一步一步の努力と活動とを指すのである。重ねて云ふ「男一匹」は器や自動器械とはわけがちがふ。假令學問がなくとも、優れた技能がなくともいふ、獨立した一個の人格の所有者で生れたまゝのキビくした人間性を具へた眞の男を云ふのである。如何なる境遇如何なる職業にも適應し、それを利用して目的に向つて進むことが出来なければ一人前の男ではない、男一匹ではないのである。



( 86 )

## 十、身を捨て、仁をなす男の意氣地

幡隨院長兵衛が、水野の邸から迎ひをうけて『野郎共あとを頼んだぞ。』と出かけて行くとき彼れの心はどうであつたらうか。兼ねて自分を亡き者にしようと思つて居る水野十郎左衛門だ、とても無事に自分を歸して呉れる氣遣はない。黽り殺しになるか八つ裂にされるか、但は死にまさる恥辱を與へられるか、何れにしても生きて再び我家の敷居を跨ぐことは覺束ない。今は全盛を極めてゐる白束組も、自分が居なくなればどうなるだらう。互ひに血潮をすゝつて誓つた可愛い、乾兒の者共の行末は如何だ——考へれば考へるほど後髪を引かれる思ひであつたら

う。

しかし他人から禮を厚くし招待れるのを理由もなく斷ることは出来ない。「長兵衛は水野の威勢におそれて酒宴によばれても行かなかつた。呆れ返つた卑怯者だ。」行かなかれば他人に斯う云はれる。それでは大切な自分の男が廢れる。否白柄組の名に瑕が付く、生きて甲斐なき身を全うせんより死んで男の名を立てよう。ウン然うだ、一念決心の臍を固めた長兵衛は、乾兒共の止るのも聞かず單身水野の邸に乗り込んだのであつた。亦勇ましいではないか。

維新の志士吉田松陰も詠じたではないか、

斯くすれば斯くなるものと知りながら

( 87 )

本

論



止むに止まれぬ大和魂

( 88 )  
 こんな事をすれば身のためにならぬ、命までも危くなる。知  
 つて居ても、これは善である。信じ是なりとする事を行ふに當  
 つては、決して躊躇しないのが、男一匹たるもの、心意氣であ  
 る。

人間の壽命は先づ五十年が相場である。しかし人の名と云ふ  
 ものは永遠に残るものだ。假令ば長兵衛があの時怖氣付いて水  
 野の邸に行かなかつたなら、彼れは詰らぬ町奴として一生を終  
 り、何人の口の端にもものぼらずに了つたらう。白柄組もそのた  
 めにけちが付いてみなちりぐになつたらう。あの時彼れが眞  
 に男として生きるには、水野の邸に乗込んで死ぬより外に道は

なかつたのである。彼れが死んだのは彼れを小さな肉の生活か  
 ら、偉大なる靈の生活に進ましめたのであつた。

萬葉集にも斯う云ふ歌がある。

男の子やも空しかる可き萬代に

語り繼ぐ可き名は立たずして

死する時に死ななければ死ぬるに増さる恥辱がある。「男一匹」  
 たるものが何んで一日半時の命をば惜んで、人の指彈をうけ阿  
 容々々と生き永へてゐることを潔しとすることが出来ようぞ。

「男一匹」の體面を汚すやうな事がある場合には、如何なる犠牲を  
 拂つてもこれを防ぐのが大丈夫の心意氣である。

自分を眞に熱愛すると云ふことは下らない自己の利害得失を



打算することではない。自己の肉體的快樂を貪ることでも無  
ない。小さい自分をすて、萬世に語りつくべき名を立つ可  
である。

彼の幡隨院長兵衛は百數十年前に死んで了つたが、彼れの名  
は今もなほわが五千萬の日本國民の腦中に躍然として、その男  
の中の男一匹として生きてゐるではないか。

けれど今長兵衛と楠公とを比較したらいづれの名が大きいで  
あらうか。斯う問ふたら誰れしも楠公の人物が偉大であると即  
座に答へるであらう。然らばその理由や如何。少しく余輩の云  
ふ所を傾聴してほしい。幡隨院長兵衛の行ひは、男らしいには  
男らしい。如何にも眼がさめるやうだ。血湧き肉躍るやうだ。

併しそれは匹夫の勇である。何んとなれば彼れが目差す所は男  
としての自分の意氣地を通すと云ふこと、白柄組の名を傷けま  
いと云ふことにあつた。

翻つて楠正成はどうであらう。成程彼れは自分の家名を汚す  
まいとは思つてゐられたらうが、眞の彼れの志しは飽くまで南  
朝正統の天子を擁護しまゐらせて、國家を泰山の安きに置かう  
と云ふことであつた。

長兵衛の死は自分の男を立てることであつたけれど、楠公は  
君國のために一身を殉じられたのであつた。その志の大小一目  
瞭然たるものがあるではないか。

今の青年の中に自個意識や自覺と云ふことをはきちがへて、



( 92 )

只ただ小さな肉體にくたいの自分じぶんを守まもつて五感ごかんの欲望よきぼうを満足まんぞくさせることが、人間にんげんとしての立派りっぱな生活せいかつと心得こころえてゐる馬鹿ばか者が、少すくなくないが呆あきれ返かへつたことである。

彼等かれらはとても自己じことは如何いかなるものかわからぬのである。凡およそ自己じこと云いふものはたゞ一個いこの肉體にくたいではない。祖先そせんから出いで、子孫しそんに及およぶ連鎖れんさであり、また社會人類しゃくわいじんると云いふ組織そしきを成なす一分子いぶんしである。この肉體にくたい一個いこそれ丈ただけが自分じぶんと考かんがへたら大間おほまちがひである。

孔夫子こうふしも志士しし仁人にんじんは身みを殺ころして仁にんを爲なす、と云いはれた。我身わがみを捨すて、國家社會こくかしゃくわいの危急ききんを救すくふと云いふことは、これほど人間にんげんとして價値かちある行動かうどうはない。それは一個いこの肉體にくたいをすて、千萬人まんにんの

人の心こころに再生さいせいする所以ゆゑである。

彼かのフランスのジャンダークが纖弱かろわい少女せうじやうの身みを以もつて祖國そこくを危急ききんより救すくひ、其身そのみは敵軍てきぐんのために焚刑ひらぎりにあつて死しんだことを見みよ。彼女かのじよがもし命いのちを惜おしんで身みを全まうしたとしたならば、佛蘭ふらん西すいはいつまでも塗炭たんの苦くるしみに陥おちつて居ゐたに相違さうゐない。ジャンが身みを挺たて、國くにの犠牲いけにへとなつたことは、彼女かのじよの名なを永遠えいゑんに残のこさせ、そして祖國そこくの獨立どくりつを恢復くわいふくせしめることが出で來きた。犠牲いけにへの價か値ちや大たいなりと云いふ可べしである。

( 93 )

凡およそ男をとこ一匹ひとたるもの死しす可べきときに當あたつては命いのちを惜おしむ可べきではない。國家こくかのため社會人類しゃくわいじんるのため我身わがみを犠牲いけにへとするは、男をとこと生うまれて來きた本懐ほんくわいで、これほど大おほなる喜よろこびはないのである。



( 94 )

しかし犠牲と云ふことは犬死とはちがふ。「死は易く生は難し」と云ふ通り困難にたへ辛苦を重ねて生きることより一思ひに死ぬ方が寧ろ樂である。下らぬ自分の偏見や意固地から死すべきときでもないのに死を早めるのは自己を偽るも甚だしく、これほど馬鹿げたことは又とあるまい。

安じて従容死につく事は、眞に命の惜しい人間でなければ出来ないことだ。徹底した自覺に基いて、自分を熱愛して居なければ出来ないことだ。

やれ借金が苦しい、やれ女に捨てられた、やれ滑つた轉んだと云つて、直ぐに死を早やめる人間には、とても生命の有難味はわからない。唯死ぬと云ふことは決して元氣でも何でもない

のである。

### 十一、バンカラに非ずハイカラに非ず

「衣至肩袖至腕」と山陽外史が歌つたが、昔しの書生のバンカラには驚く可きものがあつた。寒中單衣一枚で居る位は朝飯前事、更に弊衣破袴大道を濶歩したものださうな。これに反して今の學生は一廉の紳士を氣取り、美服をまとひ、臙脂を粧うて、以て得々として電車の中にしなをつくる。豈に時代の變遷驚くに絶えたる哉だ。

身分不相應なハイカラのよくないは勿論だが、殊更らにバンカラと装つて豪傑風を吹かせるのも亦決してほめた事ではない。

( 95 )



( 96 )

サテどつちがい、かとなれば、まあジャラ、女の腐つたの見たいな氣取郎先生よりは、袖腕式の豪傑君の方がいくら見て氣持ちがいゝかわからないのである。

だか考へて見なければならぬ。世界の文明國のお仲間入りをして、ズット生活程度の高まつた今日、昔しの通りのパンカラ主義では、一人前の男としての體面を保つことが出来ない。猶云つて見れば、我々は生理衛生の知識を持つてゐるから、昔しのやうな悪衣悪食黴菌や半風子と共棲を營むことは出来ない。垢だらけな衣服や禪を一ヶ月も二ヶ月もしめてゐるなぞと云ふことは、いくら豪毅朴訥を氣取りたくとも今の我々に出來ることではない。

これは兎に角些細の一例だが、何しろ昔のまゝなパンカラを今も猶實行すると云ふことは一寸不可能なことである。社會國家の一員として生きて行く以上、見苦しくない丈の風采を整へる事は是非必要である。いくら人間天真爛漫がいゝと云つたところが、目上目下の區別もないやうな亂暴な物言や振舞をしたりする人では、世間で彼れを尊敬し、その云ふ所を聞いてはくれまい。

「郷に行つては郷に従へ。」と云ふことは決して自分の本心まで枉げること云ふのではない。起居言動はこれを其の時其の所の習慣に合ふやうにするは、決して「男一匹」のねうちを傷けることではない、人間が社交的動物である以上當然のことなのであ

( 97 )



る。

「男一匹主義」なぞと云ふと、人は無暗に豪傑ぶつて、亂暴な言語舉動をことさらに使つて、舊式な蠻カラを振り廻す腕白者と誤解するかもしれぬが決して左に非ずだ。眞に勇氣ある者は勇氣を面に表はさないと同様に、虚榮心の全くない人間は殊更にバンカラを装ひ豪傑ぶることはないのである。

「男一匹主義」が世間の虚名虚飾を意に介しないものであることは云ふ迄もないが、と云つて野蠻な舊式の書生を以て自ら任ずるものでも決してない。

「居は氣を遷すと云ふが、衣食住の善し悪しは別に生命に別條はないにしても、その氣分や健康を支配することは一通りでない。

い。廣い豊かな氣持を持つて、完全なる健康を保全して行くために、寒暑に堪へ營養を満足させる丈けの衣食住が必要だ。

猶ほ社會の一員として立ち、爲すあらんとするには相當の風采が要る、禮儀作法が要る。それらを整へるのは決して「男一匹主義」に反くものではない。

否な寧ろ舊式な所謂バンカラには、虚榮虚飾を毛嫌ひすると云ふ一種の虚榮心に囚はれ、殊更にバンカラを銜ふと云ふ氣分があるに至つては實に唾棄すべきである。「男一匹」たるものは何者にも囚はれてはならぬ、ハイカラに囚はれてもいけず、バンカラに囚はれても猶更悪い。垢のつかない衣服を著け、見苦しくない丈けの風采を整へて、洒落るに非ずバンカラにも非ざる



(100)

が、眞の「男一匹」たるものだ。

また彼の心にもない空虚なエラガリ、大言壯語して相手を煙に巻き、女色を嫌ふと稱して殊更らに婦女子を罵倒し侮辱したりして喜んでゐる人間があるが、これも亦非男一匹の甚だしきものである。

眞に學識があり、勇氣があり、才能があると云ふことは、別に自家廣告を試みずとも自然他人が知つてくれよう。否な學識や勇氣や才能は他人が知らうと知るまいと自分に取つては價値が變るものではない。それを事更に太鼓を叩いて吹聴して廻つた所で何の益がある。幾分自分の虚榮心を満足させる丈けで、心ある人は彼れの心事の陋劣さに眉をひそめるばかりであらう。

婦人と雖もこれを輕蔑すべきでない。社會の一員として男子と同等にこれを尊敬すべきであらう。

要するに男一匹たるものはバンカラにも非ずハイカラにも非ず、眞に虚榮虚飾に囚はれざる自由なる獨立獨歩の人格を修養すべきである。そこに至つて始めて男一匹の眞價は現はれるのである。

## 十二、下つ腹に力を入れよ

スハ火事だと云ふと、枕や炭取りを擔いで駈すり廻つたり、強盜に這入られて出刃庖丁でも見せられると、ガタ／＼ブルブル青くなつて震へ出し、腰がぬけて了ふやうな男が世の中に少

(101)



くない。

平素やれ個人の獨立だ、言論の自由でゐるのと、口幅つたいことを云つてゐる先生も、反對黨の壯士か何かに襲はれて、命を取られるか、主義を變ずるかと云はれたときに、死んでも我が主義とするところを押通す勇氣がなければ、男一匹たる價值はないのである。

男子門を出れば七人の敵ありだ。男一匹として堂々自己の主義主張を提げて進むには、必ず己に敵抗する者のあるを豫期せねばならない。況して社會の表面に立つて、國家社會のため己が信ずる所を斷行せんとするに當つては、自分の生命は擲つてかゝらねばならない。凡そ男一匹たるもの疊の上で平凡な死に

方をするのは本領ではない。屍を馬革は裹む覺悟で、飽くまで奮闘する勇氣がなければならぬ。死に臨んで卑怯な惡びれた死態をする様では男の値打は全く零だらう。

人の眞價は危急の際に現れるもので、イザとなると不斷の假面も何もスツカリはげて、その人の根性がその儘サラケ出されて了ふものだ。「男一匹」として生きんとする者は、如何なる場合に當つてもビクともしない、いゝ度胸を備へなければならぬのである。然らずんば「男一匹主義」を口に唱へるも腥坊主のお經と同様に、結句何等の價値もなくなつて了ふと云ふものだ。

柔道や擊劍に由つて身體を練るのも危急の場合に具へる一段である。しかしそれはホンの末技であつて、第一に膽力を練



(104)

り、度胸を据ゑてかゝらねば、折角の腕前も實地の役に立つものではない。

よく云ふことだが、一度戦ひに出て生死の巷を出入して来た人間は、ドンナ場合に遭遇してもビクともしなくなると云ふ。それは畢竟砲煙彈雨の中に死を決して戦つてゐる間に、いつしか立派に精神修養が出来上つて、死をおそれぬ度胸が据るのであらう。

しかし實戦に臨むと云ふことは望んで出来得ることではないから、吾々は平素から勤めて精神修養を積んで、ウンと臍の下に力を入れる工風をしておく可きである。

この臍の下、丹田に力を込めると云ふことは臍つ玉のドツシ

リ据ること、臍つ玉さへホントに据つたら何が来ようとビクともしない。と云ふには理由がある。ウンと腹に力を入れると身體の重心がチャンときまつて、少し位押ししても容易に轉ばなくなる。そして呼吸は強く深く横隔膜に由つて營まれ心臓の鼓動が平調になる。此状態を保つたらば決して呼吸がはぶんだり腰がフラ付いたり、即ち恐怖の態度に變らうとしても變れまい。従つて物に恐れることがないのである。

彼の禪と云ふものも、この下つ腹に力を入れて精神統一を行ふことから始まるので、深く禪定に入つた高僧などは、泰山が前に崩れかゝつてもビクともしない臍つ玉が据つてゐる。心越禪師と云ふ大和尚が、轟然たる大砲の音を聞き乍ら一滴もこぼ

(105)



さないで大杯を傾けて、光圀公を驚かしたと云ふ話も、禪によつて膽つ玉が据つた一例であらう。

しかしそれは敢て禪に限らない。總ての雑念を打拂つて静かに精神統一を行へば、夏も猶暑からず冬も亦寒からざるの境に入る事が出来る。近頃流行に何々式静座法何々式座禪と云ふことも、要するに下つ腹に力を入れて精神の鍛錬をすることなので、「男一匹」として世に立たうとするものは、これらの何れでもいゝそれに由つて精神を鍛錬して置かなければならない。

否なその暇もない者は、唯自分で歩くときも坐つてゐる時もいつも臍の下丹田にウンと力を入れて、腰をキチンと定める癖をつけるがいゝ、呼吸は深く軽く、軀幹を真直にして、頭を正

しく、いつも心を平靜にして居る可きである。この習慣が完全に付いたら、ドンな急變に際しても、ビクともすることはない。咄嗟の間に決斷が付く、眞に「男一匹」たらんとするもの宜しく自ら努めて、この修養あつて然るべしであらう。

### 十三、獨立自營は男の面目

昔風な英雄豪傑や志士愛國者と云はれる人達は、小事に拘泥しないのを善しとして、一身一家を顧ることを恥辱のやうに思つてゐた。「妻は病床に臥し兒は餓に啼く。」と維新の志士も嘆じた如く、斯うした人物の家庭と云ふものは決して幸福なものではなく、常に貧乏神のお得意様だつた。況して自分一身を持す



(108)

るに當つては他人の冷飯を食ひ、他人の迷惑になることを敢て  
 することを意に介してはゐなかつた。

しかしそれは昔のことだ。今のやうな自由競争の社會状態で  
 は、自ら經濟的に獨立すると云ふことは、萬事を爲すの基であ  
 る。「修身齊家治國平天下」と孔夫子も云はれた通り、天下國家の  
 ために事を成さんとするには、先づ第一自己を修養し、次に家  
 の財政を整へなければならぬ。一身一家の獨立さへ全うする  
 ことが出來ぬ人間が、何んで國家社會のために盡すの資格があ  
 るであらう。

自ら經濟的に獨立するは極めて些細なしみつたれな事のやう  
 に考へるけれど決してさうでない。凡そ他人の庇護をうけ、他

人に生活の資を得ると云ふことは、これほど自己の尊さを傷け  
 る、「非男一匹」的行爲はない。

如何に親友、近親の間なればとて、他人に厄介になるとなれ  
 ば既に恩を着ることになる。他人から恩を受けることは自分の自  
 由を束縛されることだ。我れと自分の價値を引下げることだ。  
 與へると云ふことは人に勝つことだが、與へられることはそれ  
 だけ自分を弱く小さくすることなのである。

凡そ「男一匹」として世に立ち、我が信ずる所を斷々乎として行  
 ふに當つては、寸毫も讓歩假借すべきでない。然し他人から恩  
 顧をうけ情實纏綿たるに至つては、我が云はんとする所もこれ  
 を憚り、行はんとする所も躊躇するに至る。しかし敢て恩に

(109)



反き、情實を振放して事をなすに至つては、猶更男の價値のない不徳漢冷血漢である。普通の人間なら心に咎めて決して出来ることではないのである。

故に眞に自由に天下の大道を濶歩せんとするには、先づ他人の恩をうけざることである。一身一家は飽くまでも自己の勤勞に由つて保持して行くことである。凡そ不具でない立派な青年男子が、如何なる勞働に由つてか生活して行かれないことは、百年後二百年後ならいざ知らず、今の社會では決して不可能なことではない。徒らに生活難就職難を唱へるのは、アレコレと職業を選び好みするからだ。勞働を惜んで所得の多きをのみあせるからだ。

如何なる職業にしても職業と名の付くもので、忠實に働いて食へない仕事と云ふのは先づないと云つて善からう。然らば自分の天分に相當した職業を選択して、眞面目に勵んで行つたらば、他人の厄介になることなくして自活して行かれるのは云ふ迄もないこと、決して人間食へない筈はないのである。

また世間には所謂成功をあせり、唯美食を口にし美衣を纏ふことを、人生の目的と心得るの餘り、心にもない惡事に加擔して、とんでもない刑事問題に連坐したりする人間がある。これなどは實に其心事や憐む可きものである。

或ひは一婦人の愛に溺れて如何なる道に外れた行爲をも敢て辭せず、彼女の一笑一顰を買ふに汲々たる人間、或ひは千に一



つ の 僥倖を 目的に 投機に 手を出して、 一身一家の 經濟を 紊亂させて 顧みぬ 輩も 少なくない。

これらは 眞に「男一匹」の「男一匹」たる 價値を 知らぬ から 起ることである。 自分の 尊さを 自覺して 居たなら——「男一匹」の 何物たるかを 解して 見たら、 賤しき 欲望のために 惑はされて、 一身一家の 經濟的獨立を 自分で 蹂躪し 去る やうな 愚は 決して 演じるものではないのだ。

十四、 身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ

萬籟寂として 物皆な 沈黙り 返る 夜半、 フト 熟睡の 夢が 醒めたとき、 ジツと 胸に 手を 押當て、 我身の 過去を 追想すれば、 慄

然として 運命の 奇しき 戯れに 愕くであらう。 或ひは 激烈な 病魔のために スンデの ことで 命を 奪はれようとした 時もあるれば、 或ひは 恐る可き 悪魔の 誘惑に アハヤ 自分の 身は 墮落の ドン底に 陥りかけた ことも あらう。 その 他身に 降りかゝつた 大小の 禍災は 擧げて 數へ 盡せぬ であらう。 又は 思ひも よらぬ 偶然の 事件が 突發して、 幾度か 自分の 運命を 轉換し、 上下した ことも あらう。 結果は 原因を生み 原因は 結果を生み、 生れて から 今日 只今の 境涯に 立到る までには、 幾多の 有爲 轉變が あつた ことであらうか。

人は 生れ乍ら 生涯の 運命を 具へて 居るもの だとは、 彼の 運命論者の 云ふ 所であるが、 決して 一概に 御都合論とばかり 云ひ退ける ことは 出來ないのである。 勿論 手相や 人相に 由つて 其人の



(114)

既往將來、いつの幾日の何時に死ぬと云ふことまで、わかるものでないことは云ふ迄もない。併し、我々がオギヤアと生れて出て来たとき、既に両親の遺傳と周囲の境遇と云ふ特殊性を、誰れでも授かつてゐることは事實である。百人が百人人間の顔がちがふやうに、両親から授けられた體質もちがへば、その性格もちがふ。殊に「氏より育ち」と云ふ事のあるが如く、幼年時代の家庭教育が、其の人の性格や體質上に大感化を及ぼすものであることは、疑ひを挟む餘地なき事實である。斯くして各々が異つた性格と體質を有して、異つた境遇に立つ以上、決して其の運命は同じきものでないこと言を待たぬのである。

いくら無暗に他人の運のいゝのを羨んで、自分もあゝならう

(115)

とした所が、自分に具はる運がそちつに向かなければ眞似は出ないのである。牛乳配達をして大臣になつた話を聞いて、俺も一番牛乳配達をやつて大臣にならうとしたつて、それは餘りに無鐵砲だ。餘りに自分と云ふものを侮辱した話だ。

天賦の運命に身をまかせつゝ、徐ろに未來を開拓して行くことが、眞に大丈夫、男一匹たる所以である。即ち自己の両親から遺傳された天分、現在の境遇の如何を深く顧みて、靜かに目指す目的に進まねばならない。恰かも急流を横斷せんとする遊手が、上流から身を投じて、水に流されながら、斜めに對岸に涉り着くやうに、身を運命に任せながら、斷えず目的に向つて努力することが、最良の處生法である。



憂き事の猶ほ此上に積れかし

限りある身の力試さん

如何なる悲運悲境に陥つても、ジツト齒を食締つて我慢をし  
て更らに世を悲觀したり、人を呪つたりしないのが大丈夫であ  
る、「男一匹」である。少しの悲運や貧苦にワイ／＼騒ぎ立て、  
もう世の中が嫌になつたと瀧壺に飛び込む、首を縊る、咽喉を  
突くと云つた人間や、又は自暴自棄に陥つて、世にスネたり、  
悪事を働くを何んとも思はなくなたりする輩は、自分で自分  
の運命を破壊するので、とても男として共に語るに足らぬ薄志  
弱行の小人である。

如何に苛酷な運命のもとにも、泰然自若と堪へぬいて、機

到るを待つて、猪突猛進するのが「男一匹」たる者の所以である。  
時利あらずんば俎上の鯉魚の如く、ジツト運命に逆らはず、一  
滴の水を得ては激流を溯る大元氣を恢復して、事に當るが男の  
男たる價値である。

振り上げし刃の下ぞ地獄なる

身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ

如何なる悲運悲境にも泰然として、自ら樂み以て時の至るを  
待つ、その強い忍耐心こそ、「男一匹」たるものゝ身に具へなけれ  
ばならぬ所である。

### 十五、大樂天主義は男一匹なり



チヨイと失戀した、事業に失敗をした、ヤレすべつたの轉んだのと、詰らない原因のために二つとない大事な命を無造作に熨斗をつけて地獄の鬼に献上するやうな手合ひは世の中に随分多い。畢竟するに是等の人々は「男一匹」の價値を解せざる哀む可き生物である。

男一匹には事業がある。見よ社會のため國家のため爲すべき事業は世間に堆く山のやうに積まれてゐるではないか。男子跨間の一物を所持して生れた以上、大なり小なり自己の影を此大宇宙の何處にか印せずして死んでよからうか。國家人類のために何等かの貢獻するところなくては此世に生れた甲斐はない。第一自分を生み育ててくれた父母や祖先に對しても申譯がない。

眞に生きる、意義ある生活を續けて行くことが「男一匹」と生れたものゝ本分である。たつた一匹の白粉くさい動物にすてられたからと云つてそれが何んだ。些とやソツト事業に失敗し金を無くしたからと云つてそれが何んだ。

女を失つたら何故仕事に惚れぬ事業に戀せぬ。女には戀がある。男には仕事があるのだ。男の目的は婦女子の媚を買ふことぢやアない。(女は男を戀し男に頼り男に由つて生きるものだが)最も崇高な人間の理想に向つて倦まずたゆまず活動することだ。事業に失敗した金を失したなら、なせまた働いてもつと大事業を企てぬもつと大金をまうけぬ。金は天下の廻りもの失したからと云つて永久に亡くしたわけではない。鳥渡世間にお借し申



(120)

したのだ。また働けば返つて来る何層倍てふ大きな利が付いて返つて来る。仕事に失敗したら、何故再び新規蒔直して、また新たに出直して大きな事を企てぬ。何をクヨク川端柳で、ドブーンと土左衛門の改名披露をしたり、老松の枝に大瓢箪をブラさげて、折角の老木をお目出たなくなったり、乃至は鐵道や短刀毒薬でわれとわが命を縮めるケチな根性は畢竟はわが男一匹を知らないからだ。

殊に心中とやら云つて若い男と女が抱き合つて蓮の臺への半座をわけて坐りに行かうと云ふ馬鹿な考へは、女ならいざしらず、男と生れたものならチツと割りが悪い役不足だ。なめるほど可愛い女だつて、大なる人類の理想とくらべたら月と鼈で、

(121)

まるで比較になんかなるもんでない。英雄色を好むで、男女相愛するはこれ人倫のあたり前のことで決して咎む可きではないけれど、苟しくも男一匹と生れたものが女のために大事な一生を棒に振つて、イチヤク一緒に死んで行くなんざア餘んまり男一匹の面汚しだ。そんなものは男にして男に非ず、中性か女性

の待遇を與へて然る可しだらうと吾輩は思ふ。

凡そ自殺と名づけるものは、困難に堪へて生きて行く忍耐心と勇氣がないからだ、人生の目的の何物たるやを自覺しないからおこるのだ。

飽くまでも斯うと定めた大目的のために刻一刻活動して行くことは男一匹たるものゝたゞ一つの生活だ。成功の遅いのも厭



はない失敗も蹉跌も意に介するところでない。如何なる非運のものにも泰然と堪へて決して不平を零さない鞏固な精神、他人の誹謗も中傷も馬耳東風に聞流し、何人に對しても善惡共にこれを容れる大度量があつたなら、決して世の中に非觀煩悶す可きことは一つも半分もありはしないのである。

その心はいつも澄み渡れる秋の夜の月輪の如く一點の曇りも影もない。「道に叶へば心自ら樂し」で眞に男一匹の男一匹たる精神を具へてゐればいつも春風駘蕩、ニコくとして暮されるのである。

凡そ眞にニコくして生きることにほど出來易く出來悪いものはない。境遇に對して他人に對して不平不満を抱いてクヨく

ムシヤクシヤして生きてゐては大なる日々の活動力も鈍る。成功も期し難い。それでは益々不平不満がつつて、終には自暴自棄トドの詰りは自殺でもしようと思ふことになる。

運は天にあり又人にありで、自分のなすだけのこととはして、あとは運命の導くがまゝに打任せ、金があつてもニコく無くてもニコく、成功をしてもニコく、失敗をしてもニコくして濟ませる大きな心は、よほど男一匹的修養を積まなければ出來得ないことである。

近頃享樂主義耽美主義とかなんとか云ふことを騒ぐ連中があるが、享樂や耽美と云ふことは皆な主觀の態度、平たく云へば氣の持やうにあると思ふ。酒を呑み女を買ふことのみが享樂な



ら耽美なら、マアそれは云ふまい。真に至純な汚れのない美しい人生の極致を憧憬するのが享樂なら耽美なら、さうしたものを外的にほめるのは馬鹿の骨頂、どんな不運な貧しい生活の中にもその中に美を見出し、享樂を獲得することが出来得べきである。それが出来ないのは自分が悪いのだ。絶對的に云へばどんな貧しい生活にも豊かな生活にもその價値の相違はない。「粗食ヲ食ヒ水ヲ飲ム、樂シミ此内ニアリ。」と論語にもある。この衣食住や境遇を意に解せず怡々として自ら楽しむのが真の享樂たり耽美たる所以だ。

ソレを自分の生活を灰色だの生甲斐がないのと泣き言を云つて、待合で女の膝を枕に酔ひつぶれる身分を男としての最大理想と心得る青二才共は、水に寫つた月を捉へようと騒ぐ猿猴よりも馬鹿げてゐる。人世の眞の幸福眞の享樂は自分の心のもち方一つで何うでもなる。その大樂天主義に達するには「男一匹的修養を積む外はないのである。」

### 十六、 武士道の眞髓に就いて

「武士は食はねど高楊子」と嘯けば、「侍の子は腹が減つても餓うない。」とほざく、兎角武士道なんと云ふものは瘠我慢の骨頂、欲しいものも欲しくないと云ひ飽くまで氣位の高いことを尊べど、畢竟これ虚飾粉黛のうはべ道徳、武士道なんか勿論今の世間には通用しない。封建時代の野蠻的遺物である。コンナ事を



無造作に云つてのける我利々々亡者的下郎根性をサラケ出す人間が居る。

然らば果して武士道とは瘡我慢の一點張りか、今の世智辛い世の中には通用しない封建時代の遺物であらうか。否々、決して然うでない。

昔の武士の第一に尙んだのは潔いと云ふことである。物事は綺麗ザツパリあきらめを付けて、ネチ／＼ウチ／＼執念深くないことである。一時爛漫と咲き出した山櫻花がまた一時にバツト散つて行くやうに、死生存亡を達観して、死すべき時には命を鴻毛の軽きに比して、恬として顧みなかつたのが武士たるもの、心意氣であつた。わが身を知り運命を達観して、何事にも

不平不満を抱かず、見かざる時が來たらキツパリ思ひあきらめて些の妄念を残さず、従容として死を見る宛ら歸するが如くであることだ。云ひ換へればわが男一匹の大樂天主義に立脚してゐる。

凡そ人間死んで死に甲斐ありと云ふには先づ生きて生き甲斐ある生活を営まねばならない。女色に耽り、酒や煙草や思ふさま不養生をして、少しも自分の心身が傾廢して行くことを意に解せざる手合ひには命の有難味はわからない。況してそんな人間にはほんとに意義ある死に方をし、死して名を竹帛に垂れるなんてことは及びもつかない。武士は決して命をムヤミに粗末にしなかつた。切腹の前まで食養生をしたり、灸を据ゑたりし



て、死ぬ瞬間まで生を享樂することを忘れなかつた。紫電一閃  
わが頭に加はるときまでも急かす迫らず決して醜いわるびれた  
様子はなかつた。そもこれ生死を達觀した大樂天主義に非ずし  
て何んぞや。

此く武士は其生を惜しんだ。然し彼等は其以上に其名を惜し  
んだ。

男の子やも空しかるべき萬代に

語りつぐ可き名は立たずして、

千載竹帛に垂れるわが名の價値はわが小さな生命に優ること  
幾百倍ぞ。その名を傷けられることは生身を損ねられるよりな  
ほ大なる恥辱でなければならぬ。しかし名を惜むは只目先き

の空名を飾るためではなかつた。假令生きて逆賊亂臣の名をう  
けても千載の後の人にその苦衷が知られわが名を擧げることが  
出来ればそれでいゝ。金剛山に立籠つた楠公を見よ。その當時  
にあつては地下の一武將にすぎず、その忠義に凝つた苦衷を察  
してくる人は誰れ一人もなかつたにも關らず、死に至るまで  
皇室を擁護し奉つて従容死に就いた。この楠公の精神は無慮六  
紀の星霜を閲して明治大正の世に始めて世間に知られ、武士の  
典型として崇められる楠公こそ、わが武士道の精神の極致であ  
り、またわが男一匹主義の最も偉大なる代表者である。  
眼前の空名に憧憬れるのは賤しむ可き虚榮心である。國家社  
會のためにわが信ずる所を飽くまでも斷行し、千載の後に至つ



(130)

て偉大なるわが名を擧げるのが武士の事業であつた。そこに至つて始めて男に生れた意義がある。甲斐がある。萬代に語り繼ぐべき名が立たざれば何處に男と生れたねうちがあらうか。

次に武士の尙んだものは義侠の精神である。弱きを助け強きを挫き、降つて來れば敵をもこれを憐れむと云ふ精神である。義と見れば、わが一身を擲つて赴く崇高い犠牲の精神、武士たるものは夢寐にもこれを忘れなかつたのである。

力弱きもの自己に對して保護を希ふものはこれを命にかへても庇つてやる。義のために戦つて力及ばず悪戦苦闘してゐるのを見ては身を挺んで、これを庇ひ護る。そこに男の男らしさがあるのではないか。

(131)

よくある話、年若な少年が父の仇に廻り合つて既に危いところを腕前の優れた勇士が飛び出して、これに助太刀をして相手を打果す——この義のために及ばずとも螳螂の斧を振つて立向ふ健氣な態度なり、決心なりを見て、我身を忘れて飛び出す氣持に「男一匹」たるもの、心意氣があるではないか。凡そ世の中に利害打算ばかりで、意氣に感ずると云ふことがなかつたら、とても不愉快で一日も堪へ難いだらう。「頼むぞ」ヨシ請合つた！その間髪を容れざる義にして俠、一切の打算を度外した男のひらめきがあるではないか。假令頼まれなくとも人の義の爲めに戦ふのを見ては進んで一臂の力を貸す——そこに既に理屈を超越した人間らしい男らしい意氣が溢れてゐるではないか。



(132)

考へて見ると武士道の精神と云ふものは一つとしてわが男一匹主義と懸け離れた所はない。武士道は即ち男一匹である。若し此断案に疑ひを挟む論者があらば、吾輩はくどく比較説明の必要を認めない、胸のうちに今迄語つた男一匹主義の要領と武士道精神とを照し合はせれば了解されることであらうと思ふ。只注意すべきは武士道は決して一人の人間が定めた哲學や宗教とは譯がちがふ。その外觀たるや、世の變遷につれ様々に移つて行つた。しかしその根本の精神と云ふものは天地開闢の當初からわが日本の國民の心の中に漲つてゐる大和魂の發現に外ならぬのである。

余は以上に於てわが男一匹主義が武士道精神の真髓と同一で

(133)

あると説いたが、しかしその外觀は多少異つてゐる。その變遷は時代の推移に由つて生じた止むを得ない結果である。假令ば復讐親兄弟の仇を討つと云ふことはその意氣は學ぶ可しだが、今のやうな秩序立つた社會には自ら手を下して仇討する迄もなくその目的を達することが出来る、一私人が手を下して人を殺すと云ふことは現今の社會制度を紊亂させる基だからそれを爲すことは出来ない。

また「武士は食はねど高楊子」と云ふことも、武士が祿をうけて生活してゐた昔に於ては尤であるが、現今のやうに經濟的に個人が獨立して、自ら働き自ら食はざる可らざる社會で、これをそのまま實行することは出来ない。しかしいくら賤しい貧困の



境にあつても決して他人の榮達を羨まず悠悠々自適人事を盡して天命を待つ心の心は吾人は失つてはならないのである。

要するに武士道と云ひ男一匹主義と云つてもそれは新らしくどこからか湧いて来たまた湧いて来る思想ではない。大和魂の發現である。天照皇太神以來二千六百年の間うけ繼いだ精神を天真爛漫に發達させ時代の習慣に適應させたものに過ぎない。

男一匹たらんとするにはいくら古今東西の書籍をひつくり返しても駄目である。眞實の自分と云ふものに立歸つて偽らず飾らずに天賦の精神——大和魂を發揮させることに勤めなければ駄目である。物質上に於ける西洋文明に酔ふも可なり、併しなから吾人は猶ほ大和魂の本に歸つて眞の男一匹に達することに

心掛けねばならぬ。

### 十七、日蓮上人の大精神

古今東西を通じて精神界の偉人は少くないが、中に就き吾輩が最も崇拜するのは日蓮上人である。云ふ迄もなく上人はこれらの偉人中にあつて、より多く男らしいからだ。

その學識や思想に於て日蓮上人は、或ひは空海法然親鸞に譲る處があつたであらう、その身は賤しい房州小湊の一漁夫の悴として生れた。何等榮位人爵の其身に付くものは無かつたのである。一生を一山でゐて吾人に及ぼす精神的魅力が斯くまで偉大なるは何故であらう。それは日蓮の熱火のやうな大勇猛心—



意志の力に外ならぬのである。

日蓮上人の一生は奮闘——飽くまで信仰に向つて猛進する大意志の外には何者も無かつた。道義地に墮ちた彼の末世澆季の社會を救ふには唯だ一卷の法華經の功力の外には何者もないと彼れは堅く信じた。そしてこの信仰を世間に弘布するためには如何なる權威も情實も蹂躪してかゝられた。

彼は「念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊」の四箇格言を提げて天下に獅子吼し有りとあらゆる宗派を痛罵し去つて熱烈に自分の信仰を宣傳した。その勇氣、その決心、その意氣こそ進んで止まざる男一匹精神に外ならぬではないか。「苦しむものは來れ救護をなすものは我れ一人なり。『日蓮は日本國の柱なり』と絶叫し

て、刀杖瓦石の難をも物ともせず、法華經一卷の功力をば宣傳へる上人の心には眞に男の男らしい意氣が沸々と煮え立つてゐた。

断つておくが吾輩の如き凡俗者流には高遠な日蓮上人の大精神を語ることは及びもつかないかもしれない。しかし凡俗にも凡俗の見解がある。吾輩の見た日蓮は吾輩に取つては日蓮上人の精神に外ならぬのである。

俗に龍の口の御難と云ふ。一度日蓮は他宗の嫉みに會て北條氏に捕へられ鎌倉海岸の龍の口に引出されアハヤ首をはねられようとしたり。而もその首の座に就いた時も南無妙法蓮華經の題目を口に断たず、悠悠死の至るを待つて居た。其時諸くの奇



(138)

瑞現はれ、死罪だけは免がれたが遠い佐渡ヶ島へ流罪になつた  
 しかし日蓮上人の熱火の如き信仰は遂ひには頑固な幕府の人々  
 の心をも動かして罪をば免され、身延山上に安らかな大往生を  
 遂げたのであつた。

何等頼むべき権門の保護もうけず、生れた裸一貫で自己の信  
 仰を天下に傳ふ可く立つた元氣、如何なる迫害題目を唱へるこ  
 とを止めたら命を助ける然らずんば命を奪るぞ。」とまで嚇され  
 てもビクともしなかつた勇氣と忍耐は考へて見ても胸が透くで  
 はないか。これが意志の弱い人間なら殺すと嚇され、ば、ツイ  
 自分の信じてゐることも口先きで誤魔化しては嘘言を吐いて急  
 場の難をのがれようとするが當然、日蓮上人のやうに信ずる所

を飽くまで絶叫して止まぬのは眞に男らしい人物でなければ出  
 來ぬことである。

幡隨院長兵衛が水野の邸に乗り込んで行つたのも男らしい事  
 は男らしいが日蓮上人に比較すればその人物の大小は同日の論  
 ではない。吾輩は幡隨院長兵衛の心意氣は壯とするが彼れを理  
 想とするには餘りに小さい。彼れの勇氣は匹夫の勇だ。小さい  
 自分の名のためのものだ。絶大なる信仰のもとに動いた日蓮上  
 人こそ我理想の人物である。その目的なり理想は敢て衆生濟度  
 と云ふ宗教的態度にばかりは限らない。人類國家の進歩發展に  
 寄與す可きもの、自己の與へられた天職と感ずる所に向つては  
 如何なる障害にもめげず突き進んで行く勇氣の自己の目的に障

(139)



礙をなすもの自己の進路に當つて妨害を試みるものに對しては死を以て争ふ態度、生れたまゝの裸一貫、門閥や權威、何物をも頼まず頼らず、堂々と進む可き路に向つて行つた男らしさ、吾輩が日蓮を好む所以はこの點にあるのである。

彼れが信仰の眞髓を語らんとするには更に一段の詳密を要するが、今は其機會を得ないのを惜しむ。只こゝにはわが男一匹主義の理想が偶々日蓮上人の大精神、大事業の中に遺憾なく體現せられて居ることを力説して、後日日蓮研究に進む日のあるべきを期待したいと思ふ。

十八 文學に現はれた男一匹

汗牛充棟も雷ならぬ和漢文學のうちで、男一匹的氣分の溢れたものを、數へあげることには、一寸生優しいことではない。

文學と云へば多くは惚れたはれた戀がどうの青い酒がどうの世の中がつまらない厭世だ悲觀だと云つたものだ。割合に剛健だと云はれる漢詩の中にも、女々しい婦女子の情をうたつたものが少なくない。ことに日本の和歌や物語類に至つては悉くグニヤ／＼の惚れたはれたのを除いてはあとに何物も残らない。

「男一匹」主義を最もよく現はしたものと云へば漢詩なら先づ宋の文天祥の「正氣歌」だ。これは文天祥が宋の天子のために最後まで奮闘して遂ひに元奴のために幽閉され、度々食祿を以て誘惑されたにも拘らず、男子の意氣地を透し抜いて遂ひに獄中に憤



男 一 匹

死を遂げた。正氣歌は彼の抜くことの出来ぬ氣魄の結晶である。

天地正氣有り。 雜然トシテ流形ニ賦ス

下ハ河嶽トナリ 上ハ日星トナル

人ニ於テハ浩然ト曰フ 沛乎トシテ蒼冥ヲ塞グ

言々肺腑を突いて出で、讀むものをして思はず切齒扼腕して

慷慨悲憤の涙にくれしめるでないか。若し朗々と高らかにこの

詩を吟ずれば、少しくらゐの神經衰弱なぞはたちまち退散して

大らかな氣分になること請合である。

この正氣歌に模して日本男兒の氣概を吐いたのは維新の志士

藤田東湖の「和文天祥正氣歌」の一篇である。これは文天祥のそれ

に比して一層わが男一匹主義の精神を絶叫してゐる。少し長い

本 論

けれど讀者諸君の諷詠の料にもと次に全文を引いて見た。  
藤田東湖作

正氣歌

天地正大氣。 粹然鍾神州。

秀爲不二嶽。 巍々聳千秋。

注爲大瀛水。 洋々環八州。

發爲萬朶櫻。 衆芳難與儔。

凝爲百鍊鐵。 銳利可斷鏃。

蓋臣皆熊羆。 武夫盡好仇。

神州誰君臨。 萬古仰天皇。

皇風洽六合。 明德伴太陽。

不世無汚隆。 正氣時放光。



男 一 匹

乃參大連議。

乃助明主斷。

中郎嘗用之。

清丸嘗用之。

忽揮龍口劍。

忽起西海颶。

志賀月明夜。

芳野戰酣日。

或投鎌倉窟。

或伴櫻井驛。

或殉天目山。

侃々排瞿曇。

燄々焚伽藍。

宗社磐石安。

妖僧肝膽寒。

虜使頭足分。

怒濤殲妖氛。

陽爲鳳輦巡。

又代帝子屯。

憂憤正惛々。

遺訓何慙慙。

幽囚不忘君。

或守伏見城。

承平二百歲。

然而其鬱屈。

乃知人雖亡。

長在天地間。

誰能扶持之。

忠誠尊皇室。

修文兼奮武。

一朝天步艱。

頑鈍不知機。

孤至困葛藟。

一身當萬軍。

斯氣常虜伸。

生四十七人。

英靈未嘗泯。

凜然叙彝倫。

卓立於東濱。

孝敬事天神。

誓欲清胡塵。

邦君身先淪。

罪戾及孤臣。

君冤向誰陳。

本 論



男 一匹

孤子遠墳墓。

在萬二周星。

嗟予雖萬死。

屈伸付天地。

生當雪君冤。

死爲忠義鬼。

何以報先親

獨有斯氣隨

豈忍與汝離

生死又何疑

復見張四維

極天護皇基

極めて平易の中に男一匹の意氣が磅礴して居るではないか。わが朝の萬葉集には「男一匹的氣分を唄つたものが多い。前に度々引いた

男の子やも空しかる可き萬世に

語りつぐべき名は立たずして

なぞはその随一だ。

古今新古今集以後はまるで海鼠化物みたいな甘つたらしい歌ばかりで「男らしい」のは一つとしてない。只其中に異彩を放つてゐるのは源朝臣實朝の歌だ。實朝と云ふ人物は、歴史上では優柔不斷な貴公子で、とう／＼別當公曉のために八幡宮の銀杏の下で、バツサリやられて了つた弱蟲だけれど、その歌を見ると如何にも男らしいのが不思議だ。

武夫の矢なみ繕らふ小手の上に

霰たばしる那須の篠原

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君にふた心われあらめやも

本論



この二首は最も通俗に知られてゐるものだが何んと男一匹的  
気分が溢れてゐるではないか。

そこひなき淵やは騒ぐ山河の

浅き瀬にこそ仇浪は立て

この歌は素性法師の歌で、至誠の心の尊いのを唄つたので、  
前に引くのを忘れたからこゝに擧げておく。

鎌倉時代から戦國にかけてこの武將や禪僧の歌には男の雅懷を  
詠んだものが少くない。殊に少し難しいが日蓮上人の御文章類  
を研究すれば上人の「男一匹」的宗教觀が現はれる。諸君は深く上  
人を研究して其稜々たる男の氣概に觸れるべきである。  
近世のものでは云ふ迄もなく頼山陽の日本外史、體は歴史だ

が、好個の日本誌の眞髓を吐露した叙事詩である。外の山陽の  
詩にも我意を得たものが頗る多い。

殊に維新前後の志士の詩文には悲憤慷慨血湧き肉躍る底のも  
のが頗る多く、これらは作者の生涯や事蹟に照し合はせて見る  
と頗る興味が深いものである。

また俳諧にも「男一匹」的氣分を詠つたものは少くない。特に  
俳諧は特有の酒脱な云ひ廻しのなかに、「男一匹」の味ひを捉へて  
ゐるところが面白い。

菖蒲湯に裸百貫の男かな

と云ひ、

夕涼みよくぞ男に生れけり



と云ふ中に、筋骨たくましい磊々落落たる男の面目が躍如としてゐるではないか。

(150)

現代の詩文に就ては諸君既に御承知だから云ふまいが、所謂軟派の遊蕩文學の類は、吾輩には反吐を吐きたくなるものが多いこと云ふ迄もない。泰西の文學に就ては吾輩は頗る不案内だが、彼のスマイルの「自助論」(Self help)は獨立獨行して世を渡らうとする諸君の一讀する價值が十分にあらう、譯本も中村正直博士の「西洋立志篇」を始め多くある。

以上は今机上にあるもの、雜書から目に着いたものを挙げたに過ぎぬ。男一匹的氣分の漲れる書は此他にも無論甚だ多い、希くは讀者諸君、書を読むに當つて此精神を書中から涉獵する

に心掛けたら、精神的修養上に資することも多からうと思ふ。

### 十九、吾人は須らく男一匹を以て

生涯を一貫す可し。(其一)

昔は男の子が十五になると前髪を下ろし肩上を取つて、元服をした。元服をすると一人前の男になる。それ迄は半人前で子供としてしか取扱はれないが、元服をすれば先づ一人前に大人の仲間入りが出来たのである。

(151)

今はそんな極まつた儀式はないけれど先づ徴兵適齡にでも達すれば、兩親も世間も其相當に意見を尊重して呉るしマア一人



前の男として扱つてくれると云つたものだ。だが併しこの「一人前の男」と云ふことの意味、——考へ方に由つてちがふが——眞に一人前に獨立した男と云ふものはたんと世間にあるものでないと思ふ。

まア不具でもなく五體が完全して、伶俐と行かぬ迄もあたり前の人付合の出来る人間を一人前と云つて居るがそれは通俗の意味なら一人前かもしれないが、絶對的に一人前の獨立した男——即立派な一匹の男ではないのである。

凡そ一人前の人間、一匹の男と云ふものは物質的にも精神的にも獨立獨歩でなければいけない。どうやら稼いで口を餉して行かれる人間でも、俺は他人の厄介にならない、だから俺は一

人前だと威張つたつてそれは白痴の空威張り、精神的にはイン的否な奴隷にも劣つた境遇の人間が少なくない。

考へて見れば、八の字を生やし博士だの大臣だの富豪だのと云つてゐる人間に一人前の男——一匹の男にもなり得ない半人前四半人前の云は、未丁年者同様の人間の何んと多い事であらう！。そは何故か、姑らく吾輩の云ふことを聞け。

今の世の中で何が有難いと云つて金ほど有難いものはない。金があれば甘いものが食ふ。自動車にのれる。好いた女も自由になれば仇も味方になつて了ふ。だから金がほしい。こゝまでは成程御尤だ。だが此先きが悪い。

その有難い金を得るにはどんなことをしても關はぬ、操を賣



(154)

つても、義理人情を缺いても、なアに人が見てゐなければ泥棒を働いても金が得たい。——斯んな了見方の人間がウヨくと今の社會の九分九厘は占めてゐる。

淺猿しいではないか、馬鹿々々しいではないか。そんな思ひをしてあくせく黄金の光をエツチラオツチラ追ひ廻して、トドの詰りは骨折損の草臥儲け、そのうちには白髮頭の皺クチャな老人になつて此世にフエアウエルを云はなければならなくなる。男一匹を以て任じ、また男一匹を以て立たんとする諸君、卿等はこれを見て憤慨しないで居られるか。自分もそんな金錢の奴隷となつて一生を夢のうちに過す大膽な勇氣があるか。「断じてない！」と異口同音に答へられるだらう。然らば若し、

宜しく自ら修養を以て男一匹たれ、黄金に支配されずに黄金をば自ら支配すべしである。

人間男と生れ丁年以上に達したなら、先づ立派な一人前の人間男一匹たることを期すべきである。自活自營、經濟的に他人の御厄介にならないことは云ふ迄もなく、成年男子としてマア大概誰れでも出来ることである。あたり前の事實、決して誇るにも足らない平凡な事實である。

しかし食ふだけなら人間のみならず動物でも植物でも、(人間の飼養するものならいざ知らず)誰れのお世話にもならず自分でサツサと食つて飲んでゐる。自ら勞して自ら養ふは決して人間ばかりの特徴ではない。

(155)



また少しぐらゐいゝものを食はうとも悪いものを食はうとも、  
いゝ衣服を纏はうとも悪いものを纏はうとも、健康を維持する  
以上の食物や衣服はあつてもなくても關はない。別にそれらに  
は人間の價値を定める何等の力もないのである。

唯だ男一匹として天下の大道を濶歩し得るか否かは彼れが精  
神的に一人前の人間即眞に一匹の男であるか否かに由つて定ま  
るのである。

即ち金錢や威勢に由つて動かされることなく獨立獨歩自己一  
人の天地を創造して、何人にもこれを犯させぬこと——平たく  
云へば、わが思ふ所信ずる所は如何なる場合にも動さず變ぜず  
斷々乎として決行する勇氣、それがなければ一人前の男と云ふ

ことは出来ない。

いくら東西古今の學問に通じ、二つ三つの圖書館を頭の中に  
蓄へてゐたところでたゞいろんな事を諳記してゐるだけで自分  
の知識に消化してこれを實地に活用するのなければ猫に小判  
寶のもちくされ、有つて無きが如きものである。

いくら才能があつたところで、獨立した一個の主義がなく生  
活がなく、たゞ行きあたりバツタリ、御都合のいゝやうなこと  
ばかり、やつて居たんでは、所謂オツチヨイの小才子で、  
その云ふ所には何等の權威もなく重みもなく少しものゝわかつ  
た人間は相手にして呉れない。

前にも述べたが無學結構、間拔結構、無學なら無學なり、間



拔なら間拔なりに、信ずる所を固くして、ものに動かされぬ終始一貫した主義主張を持つがよい。然らば彼れは立派に一人前の人間である。真に一匹の男である。

イソップ物語の「農夫と雲雀」の話に、或農夫が隣りの人を頼んで麥を刈らうと幾日も待つてゐたけれど、來てはくれず、とうとうお了ひには自分一個で刈ることにしたといふことがある。兎角世間に他人ほど宛にならぬものはない。

物事は自ら勞してこれを爲すに如くはない。わが力を盡して事に當る習慣をつけたら決して間違つたことはないのである。他人の頼むに足らず何事にも自分の腕かぎり根かぎりこれに當るの精神は真に雄々しい勇ましい男一匹主義に由つて養はれ

る外はない。

他人の懷中を當てにせず、他人の手助けを希はないで、自分の懷中自分の力で如何なる事もこれをなせば決して男の體面を汚されることはない。完全に一匹の男として、どこまでも行かれると云ふものである。

要するに、平たく云へば自分一個のことは飽くまで自分一個で済まし物質的にも精神的にも他の干渉を容れないこと——それが「男一匹主義」であるとも云へる。どんな外的の力にも支配されず、己が信ずる所に向つて斷々乎として突貫する勇氣——それが「男一匹主義」である。

近頃の若い連中が自覺々々と云ふけれど彼等の自覺は眞の自



(160) 覺ではない。眞に男一匹として生きることが唯一つの自覺的生  
活であるのである。

## 廿、吾人は須らく男一匹を以て

### 生涯を一貫す可し(其二)

余が諸君に見えてから既に二十幾章を重ね、わが思ふ所は大  
概述べ盡して了つたやうに思ふ。わが男一匹主義と云ふものゝ  
輪廓は不完全ながら諸君の腦中に印象を残したことであらうと  
思ふ。

文に拙なるがために随分讀みづらいわかり悪い、重複した議  
論になつて了つたらう、けれど自分は文士でもなければ學者で

もない。たゞ平々凡々たる俗人の余が、余の信ずる所考へる所  
を偽らず飾らず述べたに過ぎないのだ。間ちがつた所もあらう。  
言葉の足らぬ所も少くない。これを叱りこれを正してくれるの  
は賢明な讀者諸君の御好意であらうと存ずる。

ともあれ此書を読んで「男一匹主義」に歸依する人が一人でも二  
人でもあつたら吾輩は本望である。今この稿を終るに臨み少し  
く述べ足らなかつた意見を附け加へてこの小論を了ることにし  
よう。

(161) その一つは數年來やかましい「新舊思想の衝突」と云ふ精神上の  
大問題である。時代がちがひ、境遇がちがふ親子や師弟の間に  
越えることの出来ない牆壁がある。



(162)

親の斯うと思ふ所と、子供の考へてゐることは全く反對である。親はその親からされて来た通り、子供の生活は親の意思のまに／＼自由自在に支配されて行く可きもの、それが子としての道であると思つてゐるが、新しい教育をうけた子供は、自分の生活は自己の意思の力のみで營んで行く可きものだと考へてゐる。この二つの反對の方向に働く意志が會すのでたちまち摩擦がおこる火花が散る。傷ましい骨肉の大争闘がおこると云つた次第である。

余は父兄の方の態度に就てかれこれ議論することは先づおあづかりとするが、人の子たり弟たるものがどこまで自分の意思を親たり兄たるものに反對して働かしていかと云ふことに於

て一言したい。

一體自己の一身を律するのは自己の意思の自由であるけれど、人間が社會生活を營む以上他人の恩義や人情と云ふものを或程度まで斟酌しなければならぬ。親や兄に對して、子弟たるものが相當の義務と責任を感ずるのは當然のことである。

然し十が十まで父兄の命令に盲從して、自己の理想も目的も擲つて了ふことは男と生れて餘りに腑甲斐ない。男らしくないことである。反つてそれは後に至つて親不孝となることが少くない。

飽くまでも自己の信ずる所を押通す、しかし父母兄弟に對する自己の責任と云ふことを一方に考へて、熟慮に熟慮を重ねた

(163)



(164)

末事に當らねばならない。

盲従するもよくないが我を通すもよくない。先づ熟慮、自己の意志と周囲の事情を見きはめて、徐ろに事に當り、事に當つては一意専心その成功を期すべきである。

父兄の反對を受けたとき、先づ自分の意見を述べその正しきところを明かにして反省を促すのは第一である。それでも聞かれませんば飽くまで是と信ずる所に向つてわが意志を斷々乎として行ふの外はない。

しかし假令親に逆らひ兄に反いても、それは眞に恩を思ひ、責任を感じてその誠心から出發したことであれば決して罪惡ではない親不孝ではない。

しかし今の青年がやゝもすると、父兄の云ふことを只「古い」と一言のもとにはねつけて碌に反省もしない、生意氣な自己主張を通さうとするに至つては言語道斷沙汰の限り、呆れ返つて物が云へない。

父不孝をするのを新思想と考へ、理が非でも我を通すのを近代人と心得て、ウカ／＼ノロ／＼日を暮してゐる、晝鷲のやうな青年は、いくら口先で、小理屈をこねたところで、三文のねうちもあつたものではない。

何に對しても溢れるやうな至誠の心に訴へて、深く反省し、嚴格に判斷して進んで行けば過失と云ふものは決してない筈である。後悔が多く煩悶が多いのは事をなす前に反省が足らず、

(165)



真劍にやらない所以であることが多いのである。

この新舊思想の問題と関連してやかましいものは婦人問題だ。婦人の待遇は如何にすべきかと云ふことである。

鳥渡考へても直ぐわかることだが、日本人は餘りに女子を侮

蔑してゐる。「女だから」「女なんか」と云ふ言葉はつねに使はれる。

一言に「女子供」と女は子供と一緒に無能力者同様として扱はれてゐる有様。

敢てイブセンやエレンケイやバンカーストのバタ臭い思想の請けうりではない。婦人が男子の絶好な侶伴者として生存する以上、その功勞を認めぬわけには行かない。社會を動かす原動力となり、人類生殖の重大なる任務に當らねばならぬ婦人を保

護し、尊重して行くのは男子の義務である。

婦人を尊重するのは婦人の人格を尊重することだ。「女は男の玩弄物だ」「妻と疊は新しいのがいゝ」なぞと、まるで人間を機械視して來たのは野蠻時代の遺物で吾人の取らない所である。

凡そ婦人に取つて最も尊いことは貞操である。貞操を蹂躪するのは婦人を慘殺するよりも一層甚だしいことである。

何故左程迄貞操は大切であらうか。云ふ迄もなく婦人は必ず母となる可きものだ。子の母として生きる外に婦人の幸福もなければ生甲斐もない。完全に崇高に母の任務を果すためには、結婚までは處女を守り、結婚した後は純一な愛を夫に對して捧げなければならぬ。



故に結婚の意思なくて、婦人に關係を結び、その貞操を蹂躪するものは婦人から眞に完全な母となる資格を奪ふので、従つて婦人をして精神的に一種の自殺をさせると云ふものだ。單に貞操を蹂躪しないまでも婦人を侮辱しその意志を尊重しないのは、實に不心得千萬、弱い者につけ込む卑怯未練な男らしくない行爲である。

しかし所謂新らしい女のやうに母になることを嫌ひ、動物的な自由戀愛を主張して男を男とも思はないやうな輩は、これを婦人として待遇する必要はない。彼等は出來そくなつた精神的不具者で、善良な社會の風紀を亂すバチルスである。男子たるもの宜しく一致協力して無人島へでも流して了ふ可きである。

(169)

男 一 匹 終

とは云へ新らしい女の害はまだしも、男子が女の貞操を何とも思はない下等な男らしくない根性の弊害に比べれば何萬分の一にも足らない。先づ男らしき男眞の男一匹たるものはこの根性を西の海にサラリと拂ひ落して、人の母たる大任務を帯びたる婦人を尊重して可なりである。

以上は餘計なやうだが、近頃八ヶましい新舊思想問題、婦人問題に對して些と男一匹的解釋を與へたものである。



大正五年十一月二十日印刷  
大正五年十一月廿三日發行

定價金五拾五錢

著作兼發行者 岡村紫峯

印刷者 本間十三郎  
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社  
東京市牛込區榎町七番地

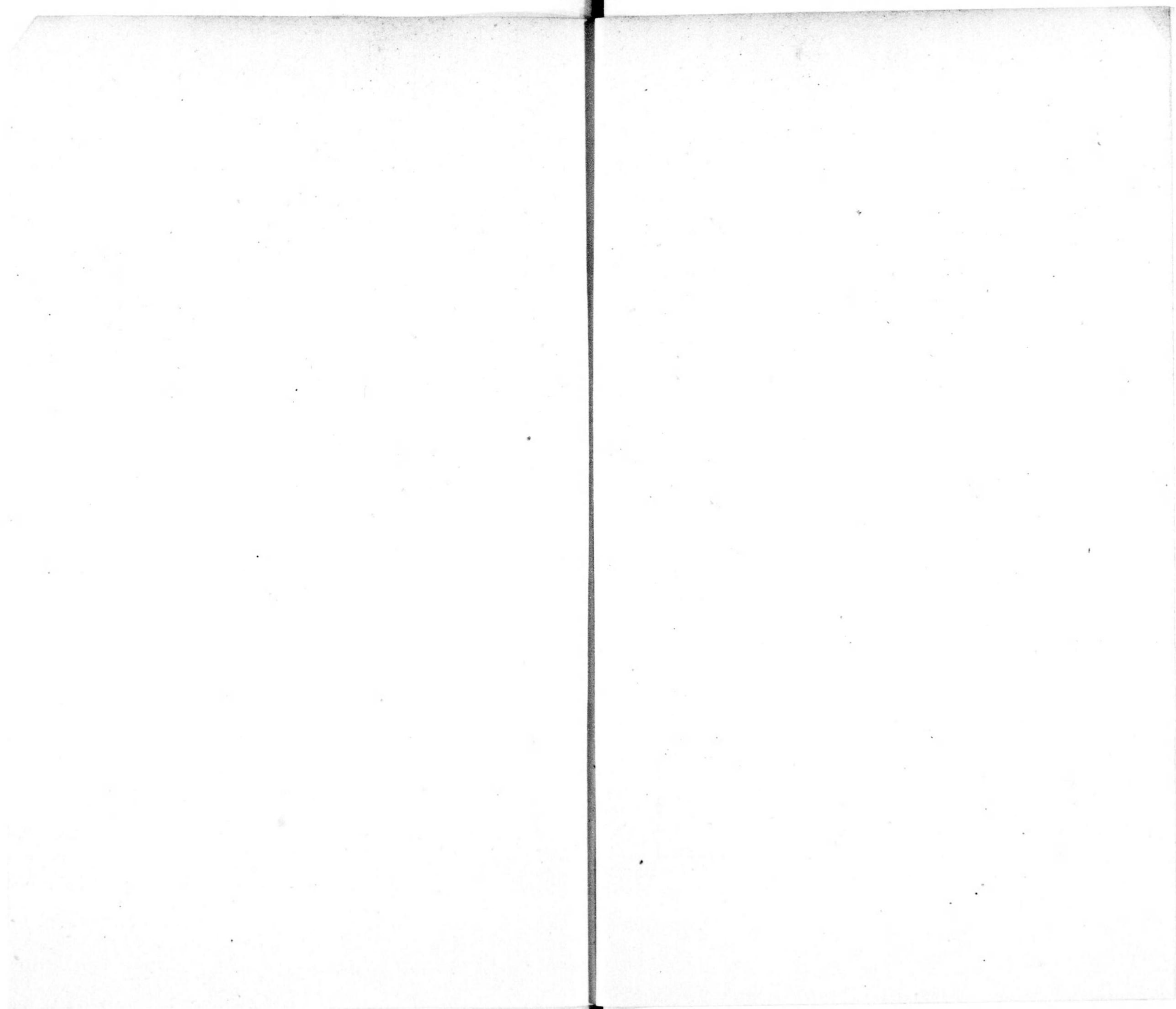
東京市赤坂區一ツ木町六十五番地

發行所

活動寫真雜誌社

電話芝六五二八  
振替東京三〇四〇一











11

